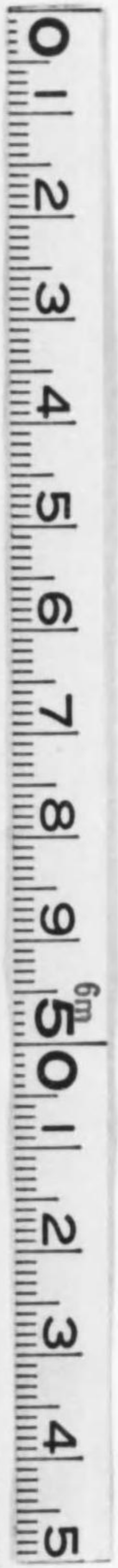


四國靈場巡拜日誌

特 261

248



始



特261  
248



尾關行應著

四國靈場巡拜日誌

立命館出版部





## 緒言

此巡拜記を草するに就て、斷て置かねばならぬ事は、各靈場の歴史、本尊の由來などを、十分に記し、一方巡拜の動機、巡拜中の感想、及日誌等をも、委しく書くが本意であるが、兩方を十分に書くと、自然紙数が層み、大冊となり、普遍的にならぬ夫よりも可成小冊子にして、廣く便宜を圖るには、何れかを簡略せねばならぬ。然るに四國靈場に關する書籍は、從來既に五十餘種もあり、最近阿波國日和佐町の、岡影明氏編集發行の、四國靈場寫真大觀などは、大に完備に近いものである。右様の次第故、各靈場の歴史、御本尊の由來等は他書に譲り、至極簡單にし、此處には夫よりも動機、日誌、感想、即ち衲の實地の行程と、實感の方を主とする事にした。此點特に諒承ありたい。従て多少の歴史、由來等を掲げし分は、寫真大觀、及四國靈場禮讚等の記事を引用せる處多し。是又諒せられたし。

次に靈場の御詠歌であります。是れは巡拜の最初より納の意に充たぬ點が多い。第一弘法大師（以下單に大師と記す。他の大師は其の御名を記す）は清涼殿に於て、宗論の砌、現身大日如來と變現せられしと傳ふる位で、即身成佛を本旨としてよい。無論指方立相の西方淨土も方便として否定はせられなんだが、夫よりも即心即佛、一層進んで法界一相、大千一如を示しての宗風である。大師の書かれし、般若心經秘鍵の序にも、

夫れ佛法遙かなるにあらず、心中即ち近し。眞如外にあらず、身を棄て、いかんが求めん。迷悟我れにあり。則ち發心すれば即ち到る。明暗他にあらず、則ち信修すれば、忽ち證す。（原漢文）

是に由ても、明瞭である。然るに靈場の御詠歌は、凡て淨土思想、往生的文句許りて有る。是れでは大師は元より、眞言宗の本意にも適ふて居らぬ。夫のみならず、中には隨分不得要領で、至て卑俗な歌も多い。一例を挙げると、第四十番の伊豫の觀自在寺の御詠歌の如き

しんぐはんや、自在の春に花咲きて

浮世のがれて、すむやけどもの

と云ふ様な、御話にならぬのもある。夫れで、七月十四日、三番の金泉寺絃元龍雅、



昭和九年八月八日  
於高知市高野寺  
風林行應（六十二歳）

六番安樂寺巽賢淳、八番熊谷寺高島成應の、三和上と熊谷寺に會合の節、話此の點に及びし處、三師共に同感せられた。又此の詠歌の作者も、何れの札所で調べても不明との事、推定では徳川の初期頃に、淨土思想の人が献詠したものであらうとの事

ある。詠歌が無いなら夫迄であるが、麗々しく御本堂の上に、金字の大額にして掲げ置くにしては、餘りにも面白からぬ感がある。各靈場の和上方も同感の人許であるが、八十八ヶ所の詠歌を、全部改作と云ふ事は、中々の事でもあり、從來あるもの故、其儘にして居ると云ふ程度で、頼りない事夥い。是れに比して、西國三十三ヶ所の御詠歌は、さすがに花山院上皇の御淑慮の下に、出来上て居る丈に、堂々たるものである。其處で納は歌道を知らず、ていをはにも通じて居らぬが、唯々大師の本意と、我が佛心宗の、即心即佛底の境界に依り、文字に拘らず、様式に捉れず、達意的に、全部改作の大願を起し、巡拜中の仕事とし、漸く出来上りし故、各札所の處に、在來の分は下に舊の字を記し、納の改作の分は、下に新の字を記して、載せて置きましたから、讀者は其心して觀られたい。是れに就ても、歌道の達人に一應斧斤を加へて貰ふかも考へたが、夫れが爲、納の本意を没却せられてはつまらぬし、然ればとて一度頼んだ以上は、夫を用ぬ譯には行かぬから、矢張り蕪作の儘を發表する事に決めたのです。此點も諒承を請ひます。

次に札所間の里程等も、全部草鞋で踏査し、明記する考へてありましたが、最初の豫期に反して、一步撫養から、自動車の接待を受けるやら、巡拜順路以外に、各方面に引廻され、行きつ戻りつの旅となり、實際の里程は自分にもさつぱり分らぬ事になりし爲、里程の事も餘り觸れぬ事にしました。是も岡影門氏の寫真大觀の方が、餘程正確であると觀て居ります。

次に、今回は急がぬ旅とて、各宗寺院及篤信有志者の懇請に感じて、靈場以外に路草を喰ふのみならず、伊豫では面河見物迄して居るので、巡拜記と申しても講演旅行か、觀光旅行か、判らぬ様な事になつて居りますが、夫等を除外すると、齒の抜けた様になるので、凡てをありし儘に記して置きました。此點も諒せられたい。

次に巡拜の動機を記するには、自然身の上話をせねばならず、又感想は日誌の中に隨處隨感に述べる事にしました。此二點も諒せられたい。

猶餘事ながら、徳島興源寺に於ける大患、及別府靜養中の概略も、卷末に記する事にしました。

## 動機

今回、納が六月五日東福寺出山後、名古屋に於て、四國靈場巡拜の事を發表するや、各新聞記者や、各方面の人々で、納に向て禪僧として、一派の管長師家を十數年もせられた人が、何故弘法大師の四國靈場を巡拜するかとの、疑問を直接に聞く人が多かつた。是は直接に問はれし人以外にも、同様の感を持つて居る人が、随分あらうと思ふから、先づ其動機から委しく述べる事にする。納は明治六年十一月十七日（陽曆七年一月五日、但し本年大陽曆發布せられしなり）但馬國養父郡廣谷村、津倉惣次の三男に生れ、幼名は峯之助と云ふ。七人兄弟の五人目で、兄が二人、姉が二人、妹が二人であつた。父は至て子煩悩の方であつたが、母は名も石と云たが、中々嚴格な方であつた。是は母の性格でもあつたのぢやが、澤山の子を育てるには、自然そうなるのも止を得ぬ事でもあつたのである。のみならず、納の家は、浄土宗安養寺と云ふ寺の檀

徒であるが、母は至て禪宗が好きで、御伽話をすることも、大抵一休和尚の話や、禪僧に關する話を、能く聽せて呉れたものです。夫れて、其頃丹後切度の文殊智恩寺（臨濟宗妙心寺派の中本山にして、日本三文殊の一なり）の住職は、眞乘和尚と云ひ、但馬出石藩の北垣家出身で、父とは至て懇意であつたので、納が初等全科卒業をした明治十六年の冬、即ち十一歳の時、文殊へ小僧に行く事になつて、愈々出立の時の、母の餞別の言が、峯さん、禪坊さんになりんさつたら、一休さんの様な、豪い坊さんに成ておくれ、普通々々の寺持坊さんには成りんさるな、一休さんのお母さんは、釋迦達磨を尻に付ける様な者にならねば、一生逢んと云れたそうな、あんたもそのつもりで勉強しておくれ。一休様のやうな豪い人になりんさつたら、寺位は何ぼうでもありますと云ふのである。夫れて、納も幼少から負けん氣の方で有たから、見とりんされ、もつと豪いものになると云ふて分れ、父に連れられて、丹後の文殊に行たのである。然るに其後隣寺の須津の江西寺に、譲り弟子となり、教養を受ける事になつた。明治二十年春十五の時、師匠の鐵翁和尚が、本孝おまへも丹後へ來てから、五年の間一度

も里へ歸らぬのぢやで、一度里歸りをして來いとて、出入の嘉助と云ふ老爺を供に連れて、往復二日中五日、都合一週間の暇を呉られたので、久し振りに、兩親や兄弟の顔を見られるのを樂みに、山又山を十二里の路を、但馬の郷里に日も暮れ／＼に辿り着たのである。然るに父はよく歸て來られたと云ふて喜で呉れましたのに、母は以の外の不氣嫌で、本孝さん、今頃何しに歸ておいてた、今頃里に歸り度い様な事では、碌な坊さんには成られませんか。五日も家においてると、里心が起て爲にならぬ。二三日したら早う丹後へ歸りんされと云ふ見暮、夫れて納も未だ子供の手で、母の眞の慈悲を酌み分ける丈の力のない時分とて、氣の強い無慈悲な母ぢや位に思ふて、誰が居つてやるものかと、三日滞在して江西寺に歸つたが、後になつて追懐すると、追ひ返された納よりも、追ひ返した母の胸中は如何許り、血の涙を絞て居た事であらう。小慈は大慈を妨ぐ、可愛い子には旅をさせよの諺その儘であると、今更感謝の閻涙に咽ぶのである。夫れから明治二十七年春、適齡検査も籤落て濟だので、愈々専門道場に入て修行する事に、師匠とも相談が出來た。其頃天龍寺の峩山先師が、二十六年に、



堺の南宗寺から天龍寺僧堂に歸られて、旭日昇天の勢で宗風を振はれて居つた。話が前後するが、衲は明治二十五年から、大阪寒山寺に寄留し、寺西乾山、藤澤南岳、五十河甚堂等の諸鴻儒に就て、漢籍詩文を研鑽して居つたが、二十六年に、大阪朝日の高橋健三、川那邊貞太郎、其他、岩井勝次郎等の有志が、拈笑會と云ふ、禪學の會を設けて、寒山寺を會場とし、天龍寺の滴水禪師を師家と仰ぎ、提唱を受け、參禪をする事になつたが、滴水禪師は二度許り來られた限りで、後は巖山先師が代て、提撕せられたので、衲は始終御給仕なそをして居ると、巖山先師が、おまへ何時迄も書物なそを捏て居らずに、早う僧堂に入て修行するがよいと云れるので、衲は適齡がすまねば、切角僧堂に入ても直に入營でもしますと、つまりませんからと申上げると、夫れもそうぢや（當時兵役は三年であつた）と云はれて居た。なぞの因縁もあるので、天龍寺の僧堂に掛錫して、修行する事にしたのである。（江西寺は妙心寺派である）さて我禪宗の雲納たる者が、愈々叢林に入て、修行をするのには、十年二十年はおろか、一生否々生れ替り死に替りても、大事了畢迄は山を下らぬと云ふ、つまり世間的に云

へば、目的達成迄は死でも止めぬと云ふ、大決心、大誓願を以て入らねば、眞實の修行の出来る者でない。夫れでも病氣に罹たり、師匠の都合で寺に喚び歸されたり、自分て棒を折たりして、百人の中、一人本色の鐵漢は出来るか、出来ぬか位である。衲は愈々天龍に掛錫した以上は、不惜身命は云ふ迄もなく、不退轉でやる決心であつたから、一應は郷里にも歸り、祖先の墓前へも奉告し、兩親にも暇乞をする必要ありと考へて、里歸りをした處が、前年歸省の時とは打て替て、母の氣嫌のよい事、愈々あつたも、大事了畢迄は山を下らぬ決心で、天龍寺の巖山様の膝下へ行て、修行をしておくれるか、此様な嬉しい事はない。夫れでこそ禪坊さんに成りんさつた甲斐がある。どんな事が有ても、願心を挫かぬ様に頼みます。此度は一生の見納めかも知れぬて、緩くりしなされと、頗る上氣嫌であつた。然るに天龍寺に入つて、四年目の二月の始、但馬から母危篤の電報が來た。さあ困た。見舞に歸たものか、歸らぬものか、見舞に歸れば母の氣嫌の悪い事は決つて居るし、歸らぬば人の子として孝道に背く。僧堂でも師親の大事と云ふて、師匠や兩親の大患危篤の場合は、直に暫暇と云ふて、下山を

許す事になつて居る位である。大千世界に産みの母は一人である。如何に母の氣嫌が悪からうが、一應は見舞に歸るべきであると決心して、徒歩では三十餘里の雪路故、到底末期に間に合はぬかも知れぬと、汽車で姫路に廻り、播丹線に乗替へ、生野銀山迄しか開通して居らぬので、夫より徒歩六里の雪道を、氣もあせりつゝ、漸く日が暮てから家に着き、足を洗ふ間も心急ぎつゝ、母の病床に見舞ふと、果して母は落窪んだ眼を睜り、衲を睨むが如き態にて、本孝さん、何しに歸ておいてた。何しにつて、あなたの見舞に歸て來たのぢや。いらん事です、あなたが歸ておくれても、私の病氣が良うなるものでもなし、男の子が居ても介抱には役に立ん。夫より天龍寺で一生懸命修行をして居つておくれたら、私の病氣の祈禱にもならうし、壽命がなかつたら菩提にもなるのです。始天龍寺へ行かれる時に、暇乞は濟んで居るから、私が病氣ぢやとて、態々見舞なぞに歸りんさらんでもよい。早う天龍寺へ歸て修行しておくれと云ふ。衲も期して居つた事とは云へ、突差に此れに應ずる丈の挨拶が出來ぬ。不得止親戚の家に泊り、通宵般若理趣分經を拜讀し、母の病苦退散を祈りつゝ、一夜を明かし、

其間に母への應答の工夫も出來たので、翌朝再び枕邊に行くと、母は、本孝さん、まだ京に歸らずにいてたかと云ふから、お母さん、そう心配しんさるな、衲も天龍寺に行つてから、四年にもなるし、願心は少しも緩んでは居らぬ。あなたの爲に、一月や二月休んで、夫れて邪魔になる様な修行なら、何にもならないかと云ふと、始て母も莞爾として安心してくれた。そうして云ふには、あなたに頼んで置きたい事が一つある。私は此家へ嫁入て來る迄に、一度だけ京參りをしたが、其のほかには一切世間知らずに、今日迄七人の子を育てるに掛て居つた。夫れて子供の方が一通り付いたら、おとうさん（良人のこと）から暫く暇を貰ふて、西國三十三ヶ所と、四國八十八ヶ所の御靈場に參りたいと云のが、一生の念願であつたが、今度はもう壽命も無いと思ふて、私が歿なつたら何時でもよい、あなたの修行の邪魔にならぬ時に、私の代りに西國と四國とに參て下され。衲曰、夫れはお母さんのお頼みがなくても、一度參り度いと思ふて居た事ぢやで、必ず代參しますと云ふと、母は非常に喜んで、ほかに思ひおく事は無いと云ふて、二月十五日、六十歳で他界した。是れがそもく第一

の最初の動機である。夫から種々の都合で、母の遺言を實行する機會も無く、漸く母の三年忌の、明治三十二年春 西國巡拜を爲し、三十三年春は天龍寺開山夢想國師五百五十年大遠諱に、兼て、天龍寺再建の落慶供養の大法要あり。同年秋には、峩山先師突然肺炎に罹られ、百方手を盡せしも、十月一日、四十八歳の世壽にて御遷化あり。實に乾坤猶暗きの感に、全く赤子の母を喪ふとは此の事ならん。後董には丹波常照寺の、東昱老師(峩山先師の法弟)、出世等の爲に、素懷を遂ぐる能はず、漸く明治三十四年春、彼岸の大坂鉢(彼岸中雲納一同大阪に托鉢に出る事)が濟んで、五月一日の入制迄、僅に三十六日間の暇を得て、四國巡拜をしたのである。其時は雲水時代ではあり、壯年の事とて、渡し場以外には一切乗物には乗らぬと云ふ誓願であつた。然も其頃、大阪に兄が居り、妹が嫁て居たので、二日間は夫等の許で休んで、三月末に阿波の撫養に渡り、眞に一杖一笠にて、雨の降る日も、風の吹く日も、歩き詰めて、札所では、本尊前に普門品心經消災咒で回向し、十三佛の陀羅尼を唱へ、聖壽無窮、天下泰平を祈り、先妣淨譽石室貞堅禪定尼之菩提(父は在世)と、有緣無緣三界萬靈の

菩提を弔し、大師堂では、大悲咒で回向し、光明眞言を唱へ、大師への報恩を爲し、其他は如何なる風景のよい處にも、休息の暇も無く、生來煙草を喫まぬので、朝出立すると、札所のない限りは、腹の空る迄休息せず、腹が減ると何處にても、便當行李を開き、茶が無ければ、路傍の水を掬て飢を凌ぎつゝ、恰度三十二日目に全部巡拜し、三番二番一番と禮參りを濟まし、撫養に歸て來たのである。其中高知の汲江寺で一日と、伊豫岩松の臨江寺で一日滞在して、洗濯なぞをして貰ふて憩んで居るから、正味三十日で、全部を巡拜した事になつて居る。夫れに其時は、奥の院にも殆んど參詣して居るので、全く飛脚同様で、親しく靈場に參籠し、内陣を拜したり、又風景のよい處に緩くり休息して、風光を賞すると云ふ暇もなかつた。何分其頃は修行最中、特に大分修行に實が入りかけて居つた時分とて、時間を空費する事を最も畏れ、眞に巡拜三昧で、一切他に互らぬ願心であつたのである。然るに西國靈場の方は、近畿地方特に京都中心に配置されてあるので、一部分には、始終參拜の便利もあり、風景もよい處はあるにしても、又一向風景にならぬ處も多い。夫故、是非今一度巡拜したいと云

ふ様な感じは、切實には發らなんだが、四國靈場は此れに反し、殆んど一方は山、一方は海を叩へ、平凡な地は少なく、大部分が風光に富て居り、又靈場も都合よく配置してあり、實に四國全部其儘が、極樂國土と云ふてよく、新しい言葉で云へば、全部が一箇の大公園の如き感じがする。夫れで其時の納の心中には、他日大事了畢したら、悟後の修行に今一度、時間の拘束も、道程の前後にも捉れず、緩々巡拜して、親しく本尊も拜し、出來得る限りは參籠もし、心ゆく迄風光をも賞したいと云ふ、切實な念願が出來て居つたのである。然るに其後は、明治三十五年十月五日、東昱先師東福の請に應じて、移幢せらるゝに際し、隨從して移錫、同三十九年八月二十日、東昱先師の遷化、九峯老師出世等を補佐し、四十一年よりは、大阪の別院を監理し、是を齊整し、段々自分の責任も重くなり、一身も多忙になる許で、其の念願を果すの期もなく、荏苒本年に至つたのである。處が本年四月には、十餘年來藤杖草鞋で苦心經營した、東福寺大本堂の落慶供養も盛大に修了し、六月四日には管長にも絶對多數にて三選する。此様な事で荏苒日を送て居ては、素願を果すの期はない。然ればとて、現職の儘

て四國巡拜と云ふ事は、周圍の狀勢是を許す筈はない。依て會下の雲衲達には、實に氣の毒でもあり、師家として、會下に別れるのは、骨肉に別れるよりもつらいが、東福寺は管長師家兼任の宗制であるから、今回納が落選して居れば、當然師家も代るのであるから、此點は會下の者も幾分諒して呉れるであらうと、斷然出山の腹を決めたのである。然らば何故、尋常の隱退方法を採らずに、非常手段的隱退の方法に出たかの疑を抱く者もあらうが、當時の東福寺派の情勢は、到底納の隱退を承認せぬ事は明瞭であつたからである。夫れでは、何故直に四國に渡らなんだかと云ふ疑問もあるが、納も實は直ちに四國に渡る考へて、大阪迄出て見たが、熟々考へると、納が出山直後は、東福寺も搜索するであらうし、或は保護願などをなさぬとも限らぬ。すれば四國は何と云ふても、土地も狭く、田舎の事故、引戻さるゝ様な事にならぬとも云へぬ。夫れでは甚だ不本意である。寧ろ暫く大都會に隱栖し、東福寺の方が、納の事を諦めて、後始末に掛てから、四國に渡る方が安全であると、考を變て、一先づ名古屋に隱栖したのである。處が納の考へては、東福寺は無論心配もし、騒ぎもするであら

うが、新聞などは、一東福寺派の管長の出山位は、市井の一出來事として眼中に置ぬてあらうと思ふて居つたのに、意外にも新聞の騒ぎが餘りにも大袈裟になり、夫が爲衲の意中よりも、少し早く發見せらるゝ事に成つた。夫れて其當時直ちに四國巡拜の事を發表したのである。然るに、東福寺や信徒の方面には、盛夏の候を避けて、氣候のよくなるを待つて、巡拜に出掛る様にと、懇切に勧める人もあつたが、衲は大體健康自慢の方でもあり、盛夏の候は巡拜者少なく、靈場も閑であるから、參籠するにも都合よく、又宿も夏は清潔であると聞及て居つたので、一同の好意を押切て、七月五日、隱栖地なりし名古屋市外勝川町地藏寺を出立して、四國に向ふたのである。

要するに四國巡拜の動機は、母の遺言で、明治三十四年巡拜したのが遠因である。恰も弘法大師一千百年の大遠諱に際して、巡拜するのも奇縁であり、幼少の頃、母が始終一休和尚の話をして、一休さんは、紫野の大徳寺と云ふ大きな寺を持て居られても、ちつとして居らず、諸國を廻て、法を弘めて居られたと、語て居つたのであるから、今回東福寺を出て巡拜するのは、母の靈も満足であらう。

次に大悟徹底の禪僧、然も十數年管長の職に在りし者が、四國巡拜とは妙ぢやと云ふ風な事を考へたり、云ふたりして居る人々へ話して置く。第一佛祖を禮拜するは、自己を禮拜するのである。佛祖と自己とを二つに見るから不思議に思ふのである。我が禪門では生佛一如位ではない。全く法界一相である。盡大地是れ沙門の一雙眼である。併し夫等は平等門から云ふので、差別門から云へば、一葉一釋迦一華一彌勒である。其平等差別の兩端を截斷して、乾坤只一人の境界から、佛に逢ふては佛を打し、祖に逢ふては祖を打する底の、大機大用を起すのであるが、常に心境一如物我不二の妙境に安住し、佛祖を禮拜する事を怠らぬ。一例を擧ぐると、我が宗祖臨濟禪師の師なる黃檗希運禪師は、閑さへあれば佛祖を禮拜して居られた。夫が爲額つたに禮拜つたが出來て居つたと云ふ位で、碧岩集第十一則の頌の評中には、

黃檗一日佛を禮する。次で大中間て曰く(唐の憲宗皇帝の第二子にして、甥の武宗の爲に苦められ、宮中を脱け出て、香嚴の知閑禪師の會下に沙彌と爲て修行をして居られ、黃檗禪師は其時首座をして居られたのである。後に大中天子、即ち宣宗

皇帝となられた方である。佛に着ても求めず、法に着ても求めず、衆に着ても求めず、禮拜して當に何の求むる所ぞ。槩曰、佛に着ても求めず、法に着ても求めず、衆に着ても求めず、常に禮する事如是。大中云禮を用て何か爲ん、槩便ち掌す（手の平でなぐる事）大中云大鑑生（あらつばいやつぢやと云ふ事）、槩云這裏何の所在ぞ、龜と説き細と説と云て、又掌す。大中後に國位を繼ぐ。黃槩に賜て、龜行沙門と爲す。斐相國朝に在り、後に奏して斷際禪師と賜ふ。（原漢文）

此等の例を見れば、禪僧の佛祖を禮拜する意義の那邊にあるかは、自ら氷解するてあらう。夫のみならず、四國八十八ヶ所の靈場を、弘法様の獨占か、眞言一宗の靈場の様に思ふのからしてが、一大誤謬である。八十八ヶ所の中、聖德太子の開創が三ヶ所あり、聖武天皇の勅願で、行基菩薩の開創が三十二ヶ所もあり、天智天皇を始め、役の小角其他の開創が八ヶ所あり、残り四十五ヶ所が全く弘法様の開創である。無論四十三ヶ所も凡て大師が巡錫せられ、荒蕪せしものは復興し、修理し、寺運を隆盛にせられた事は云ふ迄もないが、歴史を辿れば、以上の通である。夫れから八十八ヶ所

の靈場には、凡て御本尊が本堂に安置せられ、大師は其横に大師堂として、別に祀てある。大師は決して自分で本尊となつて居られはせん。本尊は十三佛と、他に五十五番の伊豫の南光坊は大通智勝佛、六十三番同國吉祥寺は毘沙門天と云ふ。例外もあるが、大體十三佛が主である。禪宗で祀る十三佛も、靈場で祀る十三佛も二つはない。浄土眞宗で御本尊とする阿彌陀様も、靈場で祀る阿彌陀如來も決して二つはない。日蓮宗で祀る釋迦如來も、靈場で祀る釋迦如來も、無二無別である。其他は擧る迄もない。佛教各宗を通じての御本尊と、靈場の御本尊と一つ事である。然れば八十八ヶ所に參るのは、専ら眞言宗の寺や、弘法様に參るのぢやと思ふのは、甚だ狭い見方である。

我が禪門では雲水修行中に、眞に願心あるものは、大底一度は西國四國の靈場を巡拜して、魔障なく大事了畢する様、祈願すると同時に、旅行の艱難辛苦をも體驗し、一方靈山勝域に觸れて、一層願心を堅固にするのと、副へては江湖の風月をも賞し、且つは民情風俗をも祭し、三拍子も四拍子も揃へての、無所得の所得からである。現

に各靈場で聞ても、他宗門の青年僧の參拜は至て希で、禪宗の雲納の參拜が、一番多いとの事である。雲納斗りては無い。天龍寺の管長を引かれてから、龍淵和尚も巡拜して居られるし、間宮和尚も、全部ではないが巡拜して居られる。斯様な次第であるから、今回納が四國巡拜をするのを、不思議がるのは、此邊の消息と、禪僧の心境とが判らぬからの事で、無理からぬ事ではある。

又一方から論ずると、日本の佛教、及我朝文化の大恩人と云へば、第一に聖德太子に指を屈せねばならぬが、其次には弘法大師である事は誰れも異論はない筈ぢや。聖德太子は十七憲法の第二條に

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり。四生の終歸、萬國の極宗、何れの世、何れの人か是の法を貴ばざる、人尤も惡しきもの鮮し、能く教ゆるを以て從ひぬ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか托りたるを直うせん。

と明示せられ、佛教を以て國教と確定せられたのであるから、佛教に取ての大恩人なる事は申迄もなく、又文學、美術、工藝、其他百般の事物に精通せられ、是を天下に

普及せられたのであるから、我が國文化の大恩人であるが、夫れに次で、大師は確に是に比すべき方である。各宗の祖師方何れに優劣のある筈はないが、弘法様は日本に於ては一頭地を被て居られる。其の全國に足跡普く、傳道利生せられし事は云ふ迄もなく、文學、美術、工藝は元より、科學例へば石炭を發見して燃へる石とて、五平太と名けられし事、土木即ち萬濃池の構築の如き迄もなされ、あらゆる方面に精通し、世を利し、人を救ふて居られる。特に日本は、元來文字のなかりし國で、支那、朝鮮から漢字を傳へて用て居つた。夫れを大師は換骨脱體して、平假名四十七字を作製せられ、其の中に佛教の深遠なる眞理、宇宙の實相を至極通俗に示され、且つ日本國民全體に、文字應用の圓滑自在の方法を與へられし事は、萬古を貫いて偉大なる恩德で、若し假名文字が無かつたら、歌を詠じ、句を作り、文章を綴るにも、兀々屹々たる漢字斗りて、如何に不便であつたかを察するに足る。然るに多くの人が其の恩德を感謝しつゝ、使用し居ると云ふ様な、殊勝な人は希れであらう。

斯く考へて見ると、弘法様の様な人を、眞言一宗の祖師の様な見方をするのは頗る

偏見で、宗派を超越して、佛教及日本人の大恩人と仰ぐべきである。夫れに参拜するに何の不思議がある。衲が大師を禮讚するのは盲目的信仰では無い。如上的確なる根據に基き、衷心より崇仰禮讚するのである。又今回四國巡拜したからとて、自己一身の利益をねだりに廻たのでは無い。上は實祚の無窮と、下は國泰民安と、特に我が信徒の人々の安寧幸福を祈り、且つ先考先妣と、本年六月八日逝去せし、家兄豊光院泰山奎洲居士、其他有縁無縁の菩提を吊し、併せては靈域勝境に悠遊して、飽迄心境を樂ましめん爲であつたのである。

七 月

五日 快晴 午後九時草鞋脚絆に身を堅め、惠京禪士隨伴、名古屋市外勝川町地藏寺



昭和九年七月四日  
於名古屋地藏寺 鳳林叟



昭和九年七月五日夜 名古屋地藏寺出立  
右 地藏寺師 三木梅山師  
中 鳳林叟 行應  
左 惠京士 現大和慈光院

發錫、一同見送り、九時四十分勝川發の汽車に投じ、名古屋にて乗替、西に向ふ。地藏寺、寶勝寺、兩和尚、及堀尾氏、茂森氏夫妻等、名古屋驛迄見送る。茂森乙吉氏は



本年七十一歳、眞宗の檀徒なるも、是非此際法名を授けられ度との請ひに、釋淨心と付與して別る。

二〇

芒鞋藤杖納衣輕、  
八十八峰途路險、  
欲問南方古梵城、  
白雲流水護行程。

六日 快晴 午前五時大阪驛に着すれば、中野惠靜居士(靜夫)夫妻、合讓等出迎へ、同時に大朝の記者寫眞班と來り、撮影、同社のハイヤにて、西區江戸堀北通四丁目の柳延胤氏方に立寄る。大阪婦人會幹部の西岡清光、林蝶子、松塚匡惠、加藤靜江、野間豐子、河崎房子、菅井富榮、錢高衣子、柿原龜野の各姉、自成一會の平野長彦氏等集合、一同午餐を共にし、午後早々惠京士、柳氏、平野氏、野間姉等と岡町、西林正見氏方に着し休息、大阪別院西川武春、西宮如意寺峰山大雄、同茂松寺大井洞雲の各師、別院惣代有本國藏、宗像豐次郎兩氏、京都より川口妙順、山添安惠、宮本福子、津田梅子の各姉、其他岡町婦人會員等來訪、本日は當家に泊す。

七日 朝、東光院善塔良關師、小畑源之助氏夫人、及丸谷妙種、豊島惠良、藥師神つたの各姉來訪、午時は高島駒姉方にて岡町婦人會幹部、西林氏夫妻、吉川直子、武富みや子、大喜田ふじ子、櫻田すゑ子、池田きみ子、北之坊繁野、羽田小華、宗像夫人、藤井たま子、横田千代子、深田きよ子、河崎きぬ子、田上かの子等の諸姉集合、送別會あり。午後二時、若林祥眞師、柳平野兩氏等來迎、再び柳家に歸り、午後四時より大阪婦人會の幹部、昨日集合の人々、其他十六人集合、送別の宴あり。同六時半川口に出て眉山丸に乗る。天保山迄大阪自成一會、婦人會員、京都婦人會員、岡町婦人會員等大勢の見送を受く。

浪速江に立寄見れば諸人の

何時にかはらぬ心うれしも

賑はしく見送る人の眞心を

獨り身にしめ舟路ゆくなり

二一

午後九時神戸港、此處迄同船見送の西川師、柳、西岡、中野、松村、末松、平野、山添、川口、増井、梅ヶ屋、中野夫人、柳夫人の各氏、西岡貞子、秋子、中野道子の三嬢、及惠京禪士等凡てに袂別す。惠京士は巡拜中是非隨伴致度希願なり。一同も是非同行せよとの勧めなりしも、矢張り初志の通り、單獨にて心閑に巡拜に上り、萬一の場合は、一電の下に直に驅付ける事に約して別る。

此處までも暮ひ見送る人々の

情けは肝にきざみ付くなり

柳淳胤居士(延胤氏)送別之韻あり。

日暮蕭條分手時 埠頭相見奈無辭

只祈一路平安旅 心逐行舟立水湄

又

斜日將沈六甲頭 天空海濶水悠悠

此行不肯說離恨 心逐眉山共與遊

隨從胤林行應老大師貌下附參眉山丸至兵庫港袂別於此 淳胤居士

九時神戸出港、愈々單獨となり、安眠す。

人々に別れて後は氣安くも

又さみしくも獨り寝の旅

八日 晴 午前三時眼さむれば、早や撫養に着し居れり。事務長の請に一毫を揮ふ。

時に大毎の記者益井康一氏、寫眞班を伴ひ來る。

眼さむれば撫養の港の朝ぼらけ

行きかう人の聲もにぎやか

船着けば疾く訪ひ來る大毎の

記者の益井の氣の早さかな

納は生來夏中汗ボに惱まさるゝ方で、特に



昭和九年七月八日 撫養港 眉山丸船室ニテ 胤林行應

今回は旅行の事故、一層甚しからんを案じて居る。然るに海水浴をして置くと、汗ボが出来ぬと云ふ事であるので、撫養に着いたら三四日緩々海水浴をして、汗ボのまじないをしてから、巡拜に掛らうと思ふて居つたので、なるべく海岸に近い處で、質素な宿をと思ひ、益井氏等もさがして呉れて、至て海岸に近い岡崎町の藤の家と云ふ旅館に落付て、海水浴を始めたのである。處が其日から警察や税務署の人々、さては自動車経営の人達が押掛けて来て、揮毫責でをる。

九日 晴 前田同様來訪多し。

十日 晴 午前十時、舊知徳島市興源寺の奥月溪和上來訪、此盛夏の炎天に巡拜するのは無理であるから、兎に角興源寺にて四五日海水浴でもして、充分静養し、初秋涼風の候になつてから、巡拜をせられよとの切なる勧めである。然し衲は、厚意は千萬忝けないが、炎暑は元より覺悟の事なり。折角巡拜に來ながら一ヶ所も參らずに遊

んで居る事は大師にもすまんから、少々困難でも十七番迄順拜し、十八番に移る時に徳島を通過する事故、其の時に暫時逗留を願ふと約したのである。

たづね来て旅を慰む法の友

是ぞまことの道の情ぞ

本日も又揮毫と訪問責である。

どこまでも人と筆とに崇られて

憩ふひまなき旅の空かな



昭和九年七月十日 撫養港於藤の家  
右 大毎益井氏 中央 鳳林行應 左 大朝増田氏

つたのであるが、巡拜者は人の接待供養を退くるはよくないとも聞かされて居るし、

又炎暑の事でもあるから好意を受ける事にした。併し一つの體からだで二つの車には乗れぬから、先口の下板自動車で一番迄送つて貰ふ事にしたら、撫養自動車の方からは、夫れでは全線バスの乗車券を三枚差上げるから、十一番の藤井寺から十二番の焼山寺へは、山又山を四里も越さねばならぬが、十一番から三十丁下で、鴨島町から此のバスに乗り、一旦徳島に出て、夫から又此バスで焼山寺の麓、左右内村さうぢうちに着し、夫より焼山寺に登られると僅に二里で、路も至て樂であるから、是非是を利用せられたいとの事に好意を受ける事にした。

○  
十一日 晴 午前六時半、大毎益井氏寫眞班等同乗、下板會社のハイヤにて一番に向ふ。

筆先で車走らせ脚あしはひま

いと面白き巡禮の旅

凡そ三里、第一番札所、板野郡阪東町竺和山、靈山寺に詣す。本尊釋迦如來大師の

作、最初の參拜の事として、三十四年前參拜せし時の事など想起し感最も深し。御詠歌前に述べし通り、在來の歌は下に舊の字を誌し、納の改作の分は下に新の字を誌す。以下準之。

靈山の釋迦の御前にめぐり來て

よろづの罪も消えうせにけり (舊)

靈山の釋迦の御法みくわに恵まれて

よろづの罪も霜と消ゆらん (新)



昭和九年七月十一日 靈山寺にて  
阿波國 第一番靈場

當山は聖武天皇御勅願にて行基菩薩の御開基なるが、大師再興せられ、四國靈場の第一番と定められしなり。此處では大阪の人で、三浦召雲と云ふ人が納め札を集めて、張ボテの修行大師の尊像を造て居る。眞に殊勝の感がした。

納め札集めて作る大師尊

多くの人の心籠らん

次に徒歩十二町、同郡大字檜村 第二番日照山極樂寺に詣す。本尊阿彌陀如來、大師作。

極樂の彌陀の淨土へ行きたくば

南無阿彌陀佛口癖にせよ (舊)

極樂の彌陀の淨土は遠からず

此の世ながらに此の身極樂 (新)

當寺も行基菩薩の開基なり。

次に二十五町徒歩、同郡板西町字大寺第三番龜光山金泉寺に詣す。本尊釋迦如來、大師の作。

極樂の寶の池を思へたゞ

黄金の泉すみたくへたる (舊)

釋迦牟尼の御法湧出づ金泉寺

六つのもまたの衆生うるをす (新)



昭和九年七月十一日  
於阿波國第三番金泉寺  
右より四人目 金泉寺山主 絃元龍雅師  
同 六人目 鳳 林 行 應

納經を請ふべく、庫裡に赴きしに、貴僧は尾關禪師ならずやとの事に左様と答ふると、先日來御待して居りました。先づく洗足せられよとの事で、時間は未だ十時過ぎなりしも、炎暑は強く、本日は三ヶ所詣でし事として、云はるゝ儘に座敷に通じ、休息して居ると、恰も日和佐町の人で、寫眞大觀の著者、岡影明氏も來山し、午後は町の有志連中や、徳島毎日新聞の記者集合し、又々揮毫責となる。當山の住職は、絃元龍雅師として、至て朗かなる天性の人である。のみならず、般若湯も中々豪の方で、隨身の久野様の心盡しの馳走で、其晩は快談縦横した。

待受けてもてなし受くる金泉の

寺に宿るも深きゑにしぞ

十二三兩日とも雨天にて山主の好意に逗留す。

昨日今日雨ふりしきり足を留め

龍雅和尚のもてなしに酔ふ

○

十四日 宿雨漸く晴る。金泉和上案内せられ、道の順にて凡そ一里、第五番同郡松坂村、無盡山地藏寺に詣す。本尊勝軍地藏菩薩、大師熊野權現より授けられし靈木にて一寸八分の尊像を作り給ひしを、後、定宵和尚が二尺七寸の尊像を作り、御胸間に納めまつる。

六道の能化の地藏大菩薩

みちびきたまへ此世後の世

(舊)

限りなき廣大願の地藏尊

此世後の世救ひますらん

(新)

當山は中々の大山なり。大正四年祝融の災に罹り、有名なる五百羅漢も焼失、漸く

今の靈像復舊せしと云ふ。併し其製作妙ならず感心せざりき。住職は不在との事、夫より約十八町、同村内にある第四番黒巖山、大日寺に詣す。本尊大日如來、大師の作。

ながむれば月白妙の夜半なれや

たゞ黒谷にすみぞのそで

(舊)

ながむれば大千世界遍照し

黒谷迄も光り滿つらん

(新)

住職面會、茶菓の接待を受け暫時休息す。此寺は故泉涌寺管長泉智等和上、壯年の頃在住せられし寺にて、衲も同師とは親交の間柄なりし爲いと懐しき感を催せり。門前に同師作吟の碑あり。又二十五丁、羅漢驛に出て汽車にて里餘、鍛冶屋原驛に下車し、第六番同郡松島村大字引野温泉山安樂寺に詣す。本尊藥師如來、大師之作。

かりの世に地行争ふむやくなり

安樂國の守護をのぞめよ

(舊)

かりの世の有漏路争ふはかなさよ

昔當地に温泉湧出て、諸病に特效ありしかば、薬師佛に縁ある地なりとて道場を開かせ給ふと傳ふ。今猶附近に少量の温泉湧出すると云ふ。當寺本堂の天井に畫龍あり。手を拍てば答ふと云ふ。龍の頭部の下にて試むるに反響あり。

手を拍てばさけび答ふる天井の

龍は繪なれど靈は活くらん

但し筆者は不明なり。

當寺にて點心を受け、夫より當寺住職、巽賢淳師も加はられ三人にて約十町、同郡御所村第七番光明寺に詣す。本尊阿彌陀如來。大師之作。

人間の八苦を早く離れなば

いたらんかたは九品十樂

(舊)

人間の四苦八苦をば除きなば

その身そのまゝ九品十樂

(新)

次に一里半、乗合自動車にて阿波郡土成村、第八番普明山熊谷寺に詣す。本尊千手觀世音菩薩。大師の作にて、頭髮の中に百二十粒の佛舍利と、御胸間に熊野權現より靈授の、一寸八分の金像を納めまいらす。本堂は昭和三年焼失、今復興中なり。

新たけとり水くま谷の寺に來て

難たげ行するも後の世のため

(舊)

觀世音慈悲の深さや熊谷に

御法は何時も榮えますらん

(新)

今夕は當山に參籠の事となる。一浴後揮毫を爲し、金泉、安樂、熊谷の三師と、御詠歌の事等大に意見を交換し、藥石を共にす。

打とけて法の話に興すれば

旅のつかれも忘れぬるかな

金泉和上は明十五日早天、太山寺の津葬に赴かるゝの用務ありて夕景歸られ、巽師は同宿す。當山庭前にある臥龍松は、希代の名木にて蜿蜒の狀全く臥龍の如し。

臥龍松幾千世までも縁濃く

○ 御法と共に彌や榮ゆらん

十五日 晴 早天發錫、巽師は門前にて別れ、熊谷山主高島成應師は十一番迄案内せらるゝ事となり、約十八町細き畦道を曲折しつゝ行けば、畑中に寺あり。是れ第九番正覺山法輪寺なり。本尊涅槃の釋迦如來、大師の作。當山は元白蛇山法林寺と號せしを、天正の兵火に罹り、今の山號寺號に改稱せらる。

大乘のひほうもとがもひるがへし

轉法輪の縁とこそきけ (舊)

正覺の道に進むる法輪寺

迷の衆生縁とこそなれ (新)

住職在山、茶菓等の接待を受け、次に三十五町、内八町上り、其の坂路縁樹影濃かにして、夏猶涼しの感あり。阿波郡八幡町字切幡、第十番得度山切幡寺に詣す。本尊

千手觀世音菩薩、大師の作。

欲心を唯一筋に切幡寺

後の世迄のさわりとぞなる (舊)

迷ひをば唯一筋に切幡寺

後の世迄のさわり除かん (新)

當山は得度山、灌頂院切幡寺と稱す。弘仁年間大師此地に來られし時、山麓に一人の心正しき老嫗住み、機を織て暮して居りし。一日見すほらしき旅僧來り、托鉢を爲す。老嫗は喜んで施物をなす。旅僧は大師なりし。七日間來り、七度施を受け、最後に布切を請ふ。老婆は織つゝありし布を、惜氣もなく切り施す。大師はその殊勝の志に感じて、老婆の望みをたづねし處、千手觀世音菩薩の像を彫んで衆生を濟度したしとの事、そこで大師は天皇に奏請して、一夜の間に本堂を建て、一刀三禮、千手觀世音を刻み、更に老婆の願を容れて出家得度せしめ、秘密灌頂を授けしところ、その刹那、老婆は肉身のまゝ千手觀音の姿に變りしと傳ふ。それ故當山の本尊は二體あり。





一體は大師作の千手観音、一體は老婆の即身成佛の千手観音で、是は秘佛になつて居るとのこと、暫時休憩して山を下り、大野川を渡り、敷地村を経て約二里半、麻植郡西尾村字飯尾、第十一番金剛山藤井禪寺に詣す。本尊藤師如來、大師作。

色も香も無比中道の藤井寺

真如の波の立ぬ日もなし

(舊)

色もかも無比中道の藤井寺

真如の月は何時もさへなん

(新)

當寺は禪臨濟宗妙心寺派なり。住職に面會し、暫時休息。夫より約三十町、鴨島町に出で、此處にて高島師に別れ、單獨にて撫養自動車よりの切符にてバスに乗り、徳島に向ふ。今回金泉師、安樂師、熊谷師の懇切は實に感銘の至りなりし。

照りはゆる夏の日ざしも厭ひなく

道しるべする心尊さ

中途にて大毎徳島支局長西川良三郎氏、及寫眞班乗込み、午後一時過ぎ大毎支局に

着し小憩、午後三時再び撫養自動車に乗り、焼山寺に向ふ。左右内の終點より麓迄三十町あり。徳島より同乗せし麓村の木材商西浦鹿一氏、自轉車を左右内に預け居り、夫れに乗りて歸るべきに、其自轉車に納の複子全部を積み、自轉車を手押しにしつゝ、同伴案内せらる。其事小なるが如しと雖も、此の炎暑の砌、糸一筋も荷になるものを、自分の時間も勞苦も顧ず、然も徒歩して隨行せらる。實に奇特の至りである。

塵ほどの物も荷となる夏の旅

たすくる君の心ゆかしも

かりそめの事とは云へど其心

いとうつくしく我はうくなり

本日は焼山寺に登りて參籠の考へなりしも、時間も遅くなりし爲、同氏の斡旋の下に同村麓屋に宿す。宿の夫妻至て親切に新鮮なる蚊帳、蒲團等を要意し呉れ、初めての木賃ホテルも至て氣持よく、西浦氏や他にも來訪し、やがて解定す。

○

十六日 午前五時出立。焼山寺に向ふ。此山は四國靈場中屈指の難處にして、藤井寺より順路に登るには四里八丁高山二つを超えて登るなり。今は交通開け、左右内迄自動車のある故、徒歩二里程で詣るを得るなり。此の眞夏の只中にも、深山の事とて溪谷には河鹿鳴き、樹間には鶯巧に囀るを聞く。全く塵寰を絶するの心地なるも、急坂を上る事とて全身流汗淋漓たるを免れず。

我が旅を禮讃するかホーホケキヨ

谷間のかじか調子そるへて

山高く谷深ければ眞夏にも

樹々にうぐひす啼きわたるなり

珍らしや夏の木立に鶯の

聲をきゝつゝ迎る山みち

谷間には河鹿のこゑのゆかしさよ

けはしき道もいとたのしけれ

鶯やかじかのこゑはよけれど

けはしき山路瀑つせの汗

約二十町位を登りし處に右門三郎臨終の杖杉菴あり。昔し衛門三郎なる強欲非道の者あり。大師の感化に自分の罪惡を悟り、大師に會ふて凡てを懺悔しようとして大師の後を追ひ、八十八ヶ所を二十度、野に伏し山に寝ねて巡りくたるとも、大師に會ふこと能はず、それではと逆に巡り、此處まで來りしに、老體の所へ長い旅の疲とて病氣に罹り、今は一步も進む事能はず。大地に打仆れ我が一念も叶はず、空しく死すること誠に残念と涙に咽び、息も絶えくの處へ、忽然として大師出現し給ひ、其方無道邪見なりしも、惡に強ければ善にも強きものかな、今は修行成就して罪障消滅したれば、未來は助け得さすべし。又何にても望みあらば叶へ遣すべしと仰せられたれば、衛門三郎限りなく喜び、私事念願相叶ひ、その上未來を助け賜る上は外に望みはなけれど、私元歴々の一族にてありしも、民間に降り今日迄の艱難忘れがたく、何卒願くは豫州の城主河野の世繼と生れたしと願ひたれば、大師御許容ありて一つの小石に、衛門三

郎と書て左の手に握らせ、又一卷の經文を懐中に入れ與へられしに、三郎は大師を拜み、安らかに往生を遂げし。時に天長八年十月二十日の事なりし。かくて三郎の屍を埋め杖を墓標に立て給ひしに、其後枝葉繁り、今日の如く生育せり。これを杖杉と云ふ。今のは二代目と云ふ。納も三郎の爲に回向し一休す。

ありがたやざんげの徳のあらわれて

後生善處のゆるしとぞなる

夫れより十二町、名西郡下分上村字左右内、第十二番摩盧山燒山寺に詣す。本尊虚空藏菩薩、大師作。

のちの世を思へば苦行燒山寺

死出や三途の難所ありとも

(舊)

法の道のぼる苦行を燒山寺

無明のやみの難所あるとも

(新)

當山は大師四國創開の砌、一本杉迄登り、當山を見渡し玉ふに一面の火なり、依て

摩盧の印を結び眞言を誦じつゝ進み玉へば、一步々々に火は消え、終に當山まで上られしに、大火焰を吐きし毒蛇は岩窟に潜伏せり。大師岩上に檀を設けて護摩法を修し給へば、虚空藏菩薩大光明を放ちて感應まじくたりと云ふ。故に摩盧山と名く。摩盧は水輪の義、寺を燒山と稱し虚空藏尊を本尊として安置し給ふ所以なりと傳ふ。當山は千年の老杉轟々天に冲するの勢にて、其森嚴雄大夏猶寒きの感あり。

燒山寺千年の杉のむらがりて

瀑なす汗も早やひきにけり

山主茶菓を接待せられ、是非一夜にても參籠をとの勧めなりしも、複子も宿に預けあり、且つは書信類の整理もする考へなりし爲、厚意を謝して下山す。山主門前迄見送られ、且つ曰く。拙僧も達者なれば阿波だけでも御伴致度に、何分御覽の通り輕い中風の氣にて、歩行困難、故に遺憾にたへずと、眞情溢れ衲の姿の見えぬ様になる迄佇立見送らる。午前十一時頃宿に歸り、本日は諸方よりの書面の整理、返信等を爲し滞在す。

○  
十七日 早天發足。三十町左右内に出て、夫より乗合にて約七里、午前九時半名東郡上八幡村、第十三番大栗山大日寺（一の宮とも稱す）に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、道を隔て、隣りする阿波一の宮の本地佛で、行基の作、大師作の大日如來を合祀し大日寺と稱す。

阿波の國一の宮とやゆうだすき

かけてたのめや此の世後の世 (舊)

阿波一の宮と稱ふる大日寺

衆生の惱み照し救はん (新)

暫時休憩し、住職大栗智榮師の案内を受けて約二十町、同郡國分寺字延命、第十四番盛壽山常樂寺に詣す。本尊彌勒菩薩、大師作。

常樂の岸にはいつかいたらなん

ぐぜいの船に乗りをくれずば (舊)

常樂の岸をいづくとたづぬれば

たづぬる心淨土なりけり (新)

同寺住職の談に、本月十四日外出より歸りしに檀徒の某來り、本日尾關禪師に似たる六十餘の老翁來り、宿を求められし故、鄭重に座敷に通し、待遇しつゝあると、やがて二十四五位の婦人尋ね來り、斯々の老人來りし筈、夫れは我が連れの者故同宿を乞ふとの事に、兎に角座敷に通すと、丸て夫婦の如き様子で不審にたへぬから、一度來て見て貰ひたいと云ふ。然るに尾關禪師は、本日漸く熊谷寺を出立せられし事を聞及んで居つたので、當寺へは二三日後ならでは參られぬ筈、特に尾關禪師は一人旅なるも、或は寺院の隨行する事はあるべきも、女人の連れはない。且つ其老人は白髪を蓄へ居ると云ふ。禪師は剃髪し居らるゝ故、全然相違なる旨を申聞かせし云々との事にて、一同呵々大笑せり。又是旅中の一ナンセンスなり。

我に似し巡禮どのもたをや女を

ともなうまゝに人のあやしむ

暫時休息、次へは僅に八町の處ゆるゑ案内を謝し、同郡同村大字天野、第十五番薬王山國分寺に詣す。本尊薬師如来、行基の作。當寺は聖武天皇の勅願にて諸國に國分寺を立てられし一つなり。

薄く濃くわけく、色を染めぬれば

流轉生死の秋のみちば (舊)

春の花秋の紅葉と染め分けて

野にも山にも慈悲のみすがた (新)

當山は曹洞宗に屬す。住職立木玄雄師と云ふ。是非點心差上度且つ警察より御保護の爲尊師參詣の節は通知を請はれて居るとの事に、洗足して立木和尚と閑話しつゝ、點心を受け居ると、警官二人來訪、何か御用もあらば遠慮なく申聞けられたし。本部よりの命ですからとの事に、別段用とてなきも、夫れでは徳島の興源寺に、本日々景迄に着する旨、電話丈け頼み度と申置き、又十三町同郡同村、第十六番光輝山觀音寺に詣す。本尊千手觀世音菩薩、大師作。

わすれずも導きたまへ觀音寺

西方世界彌陀の淨土へ (舊)

十大願はもらさじ觀世音

たとへ五逆の罪はあるとも (新)

當寺住職は不在なりしも所化二人にて何かと便宜を計りくれ、且つは參籠をも勧められしも、既に興源寺へ電話せし事として好意を謝し、扇面等を揮毫し置き門前よりバスにて又十八町、同郡南井上村大字井戸、第十七番瑠璃山、妙照寺、通稱井戸寺に詣す。本尊薬師如来、聖徳太子御作、御胸に毘首羯磨天作、一尺二寸の薬師如来を納めらる。

をもちかけをうつして見れば井戸の水

むすべば胸の垢やをちなむ (舊)

我心うつして愧ぢよ井戸寺の

水の清きに澄みかへらなむ (新)

當山は井戸寺とて大師四十二歳の時當山に來錫、一夜にして井戸を掘り自分の面影をうつして石に是を彫うまれしと云ふ。是を一夜建立の井戸寺と云ひ、又其石像を日限大師と稱し一般の尊崇篤く、村名の井戸と稱するも實に是に起因すと云ふ。併し今は其の井戸も水不足なるにや手洗ひ水にも不自由なる在様なりし。

來て見れば手洗ふ水もなかりけり

かりの名をとむ井戸の古てら

夫より時間も遅くなりし爲バスにて約二里、午後五時半德島市助任町興源寺に着す當山は蜂須賀侯爵の菩提所にて、現今猶境内七千餘坪、禪堂等もある大地なり。山主南陽軒奥月溪老師、諱宗海、建仁默雷和尚の駿足なり。先日撫養迄來訪ありし位故歡待厚遇至らざるなし。

溪水たにに月の光のうつること

道の交まじいと親しかも

元よりも主まじの心海のごと

いとゆたかにも足をやすめん

十八日 早天、德島縣特高課長西田永一氏、警察部長松崎陽一氏の代理として來訪あり。



昭和九年七月十八日  
於德島興源寺 歡迎會記念

り。長野縣警察部長山本義章氏より老師御保護の依頼あり。全縣警察署に傳達致置候故遠慮なく御用申付られ度との事なり。別段是れと申して御頼する事はなからんも、何分宜敷と答へ置き山本氏へも禮狀差出す。午後五時より奥老師の居士大姉にて組織せる鳴道會々員の歡迎坐談會あり。臨江寺小熊豐雲、瑞岩寺山形物外、雲水菴鈴木宗雄の三師、林爲亮、林敬文、古出直

三郎、清岡勸弘、今津忠能、山崎久藏、原菊太郎、今川常太郎、菊谷榮次、木谷豊一、平野直太郎、米山精一、土居政雄、宮崎信衛、多賀屋朴叟、大谷源之助の諸氏來會一同歡を盡して午後九時散會。

十九日 晴 來訪多し。揮毫。

二十日 晴 山主及林爲亮氏、守住千代姉等と、凡そ里餘、當山開山塔所、雲水菴に詣し、拜塔し、點心後揮毫、午後三時歸山。

二十一日 曇時雨 早天大阪より柳延胤、西岡清光の姉弟相連れ來訪あり。

海を超えをとのへ來るはらからの

真心いとゞ我はうれしも

二十二日 晴 奥老師、柳淳胤居士と共に、東新町守住官平氏別莊に赴き饗を受く。

二十三日 時雨 佐古九町目桂ため子氏方の請に赴く。山主及柳氏同道、西岡姉は林

爲亮氏令嬢節子と讃岐金毘羅に參詣し 夕景歸山。柳氏と共に同九時小松島より乗船歸阪。

二十四日 本日巡拜に出立の筈なりしも雨天の爲見合す。早天、柳、西岡兩氏より無事歸阪の報あり。揮毫等を爲す。

二十五日 午前八時、ハイヤにて奥老師、守住千代姉、林節子嬢等同乗一同見送の中に興源寺出立。約三里半、勝浦郡小松島村字田野、第十八番母養山恩山寺に詣す。本尊藥師如來、行基の作。

子を産めるその父母の恩山寺

訪ひがたきことはあらしな

産みそだて山より高き父母の

御恩はいかでむくはざらめや (新)

當山は元、聖武天皇の勅願により行基菩薩の創建せられしものにして、當初は大日山福生院密嚴寺と號したのである。弘法大師暫く留錫の折柄、大師の母公慕ひ來られ、遂に當山にて剃髮せられ、此處にて臨終なし給ひしより、母養山寶樹院恩山寺と改められしなり。

次に一里、那賀郡立江町に着し、第十九番摩尼山立江寺に詣す。本尊地藏菩薩、大師作。

いつかさて西のすまゐの我たちへ

ぐぜいの船に乗ていたらむ (舊)

五逆世のけはしき岸に立江尊

ぐぜいの船は何時も運ばん (新)

當山は四國靈場中特に御關所と稱し、本尊の靈驗特に著しく、不具者及難病の平癒或は悪心者の佛罰等いとまなき靈驗あり。遍路諸人の恐るゝ所なり。當山住職は不在なりしも内陣に參拜し、寺の隣の角屋旅館に落付き一同別盞を揚げ、午後二時一同は

德島へ歸られ納は當家に一泊し、明朝二十番へ向ふ事とす。夕景立江寺執事來訪、晝帖の揮毫を爲す。當駐在巡查部長藤本美行氏來訪、明日隨行するとの事。本日時雨。

○  
二十六日 午前八時藤本部長隨伴、ハイヤにて三里餘生比奈村に着し、夫より急坂二十五町、全く胸突き峻路許りにて時は盛夏なり。德島にて少々腹を壊し居りし際とて、流汗淋漓全く氣息奄々たる有様にて、三四町行ては憩ひく登る。

常日ごろ、自慢の脚も此の坂は

喘ぎくゝて迎るをかしさ

元氣よき藤本ぬしも此山は

思のほかに難所とぞ云ふ

午前十一時頃、漸く勝浦郡生比奈村、第二十番靈鷲山鶴林寺に辿り付、本尊勝軍地藏菩薩、大師作。

しげりつる鶴の林をしるべにて



大師ぞいます地藏帝釋(舊)

岩角を辿りて登る鶴林寺

やがて高嶺の月をながめん(新)

○ 當山は大師未だ御青年の頃、本郡西須賀の里に憩はせし時、勝占明神の靈夢を拜し當山に登り修行なし給ふに、老杉の梢につがひの鶴の翼を伸ばして一寸八分の金像の地藏尊を守護し居れるを拜し、大師渴仰これを受けて更に御丈け三尺の尊像を刻み、金像を胸間に納めて本尊とし、伽蓋を建立し、其靈瑞に因み寺號とせらる。源頼朝公靈益を蒙りしより勝軍地藏と稱せらる。靈驗誠にあらたかなり。當寺住職は肺患にて出養中との事なりし。夫より急坂二十餘町を下りて大井村入船旅館に着す。時間は正午頃なりしも餘の疲勞に太龍寺に登る勇氣もなく、本日は當家にて休息する事とす。當村駐在の佐藤巡查も來り、一同にて點心、後、藤本氏は立江に歸る。旅館の者至て親切に旅情を慰む。本日も時雨。

二十七日 早天、佐藤巡查隨伴、大井の那賀川の渡しを渡り、急坂三十町、那賀郡加茂谷村、第二十一番舎心山、大龍寺に詣す。本尊虚空藏菩薩、大師作。

大龍の常に住むぞやげに岩屋

舎心聞持は守護の爲なり(舊)

大龍も御法の徳に従ひて

今は御山の守りとぞなる(新)

當山は太古神武天皇御登山遊ばされし舊跡と傳ふ。大師十五歳の時、南舎心で求聞持の修行あり。次で延暦十一年に登山あり。同十七年桓武天皇の勅を奉じ、伽蓋を建立遊ばせり。當山は西の高野と稱する位にて堂塔の宏壯なる事阿波第一と云ふべし。

大龍寺西の高野と稱ふげに

いと嚴かに見ゆる嬉しさ

住職は吐峰と號し八十二歳、耳は遠いが嬰鑠壯者を凌ぐ。兎に角休息せられよとて書院に入れば、床上達磨大師の大軸掛り居れり。依て衲が山主に向て、貴山には達磨

を拜せられ納は弘法さんの靈場に參る。全く禪密一致、入我々入なりと云へば、老僧呵々大笑す。執事は鳥村泰雅師と云ひ種々厚遇せられ、本日は當寺にて休息せられよとの事なりしも、時間は朝の八時頃の事故岩屋寺迄赴き參籠の事とす。鳥村師山内隈なく案内せらる。杉の老木森々たる爲め濕氣を呼ぶ事甚しく、結構なる伽藍も三百年は保たず腐朽し去るとの事、實に何れの堂宇を見ても腐朽の甚しきを感じず。其維持の困難察するに餘りあり。岩屋寺は無入故御不自由なるべしとて所化一人を隨伴せしめらる。三人にて數町舍身岩に上る。奇岩削石數十丈の上にある。大師求聞持の法を修せられし處と云ふ。直下を見れば十數丈の老杉も苔の如くに見ゆる位故其懸崖察するに足る。氣弱き者ならば脚をのゝくべし。眼を放てば山又山は波浪の如くに起伏し、其れを超えて遙に大海をも望む。其偉觀、壯絶快絶去るに忍びざるを覺ふ。

ますらをも脚をのゝかん舍心岩

されどもながめいとゆたかなり

折しも遙か見おろす溪間より白霧群り立ち上りければ、

溪間には霧立ち昇る舍心岩

羽化登仙の心地こそすれ

約一時間餘眺望を恣にし、夫より山腹を辿る事四十餘町岩屋寺に着す。直に岩屋に入らんと請ふに、窟中は氷室の如く涼冷なれば日中に入ると、出でからの反動の酷暑に堪へがたき故明早朝御案内申すべしとの事に、本日は見合とし洗足す。此寺は住職一人のみとて、大龍寺よりの伴僧と佐藤巡査と共々座敷の掃除を爲し、納を休息せしむ。其間に數町隔てし處の信者夫妻來り炊事、風呂たき等を手傳ふ。晩は加茂駐在の田中勝美巡査も來り賑かに一夜を過す。本日快晴。

二十八日 未明、蠟燭をたよりに岩屋に入る。是は縣下唯一の石灰洞にして奥行五十間あり。洞内最も廣き處を千疊敷と言ひ、狭き處を龍の迫割と稱し洞内に湧泉あり水常に絶えず、其上に大師の像を安置す。鐘乳石は側壁に附着して袈裟掛け、燈籠石等種々の奇形を呈す。この窟は大龍棲みて大師當山に修行の際、其の惡龍の妨害する

を封じ給ふと傳ふ。

眞夏にも肌へ粟立つ冷さに

骨身も清き心地こそすれ

大龍の棲みしと傳ふ此岩屋

げにめづらしきほらの穴かな

六時半出立、途中佐藤巡査は大井に歸り、當寺住職と田中巡査及信徒の人々と一里餘見送り、途中岩屋寺和尚等に別れ田中氏のみ隨行す。本日は暑氣特に劇しく喉の渴く事甚し。幸に一軒屋あり屋後に清水湧出す。掬して喫するに全く甘露の如し。

汗の道喉をうるほす岩清水

甘露々々と舌鼓うつ

午前九時同郡新野町大字荒田野、第二十二番白水山平等寺に着すれば、住職谷口津梁師、及新野町巡査部長小竹文雄、荒田野駐在松田爲雄氏等待受け居られ、先づく洗足休憩ありてから本堂に案内仕る。本日は是非當山に一泊願ふ様準備し居るとの事、

時間は早きも次へは七里もある事故好意に應じ、洗足休憩し居ると檀信徒の有志數名來會し、一同打連れて本堂大師堂に詣す。本尊藥師如來、大師作。

平等にへだてのなきと聞時は

あらたのもしき佛とぞ見る

(舊)

平等にへだてなきこそみ佛の

あらたのもしき道と仰げよ

(新)

當山は大師四十一歳の御時、自他厄除修行の爲靈地を此處に求められしに、藥師如來の出現に依て伽藍を建立せられしと傳ふ。大師又加持水を得んが爲井戸を掘られしに、乳の如き色を帯びし靈水湧出づ。其加持感應の德尊きを愛てたまひ、これを山號に遣させ白水山と名づけられしあり。その白水の井戸は今に大師堂の西側にあり、衲も是れを喫せり。齊後揮毫し、夕景より有志十餘員と座談會を開き種々亨應せらる。

荒田野と呼べども寺は平等寺

人の心もなごやかにこそ

二十九日 好晴 山主は午前三寺より兼務寺の法要に赴かる。衲は有志の人々より揮毫の禮にとて次の札所迄七里の路をハイヤにて送らるゝ事となり、松田巡査隨行七時出立す。同九時日和佐町に入る。岡影明氏と第三番金泉寺にての約ありし爲同氏を尋ね、其實兄岡桂三郎氏經營の濱屋旅館に宿を定め、複子を預け置き同町にある第二十三番、醫王山藥王寺に詣す。本尊藥師如來、大師作。

皆人の病ぬる年の藥王寺

琉璃のくすりを與へましませ (舊)

皆人の病除かん藥王寺

琉璃の藥は何時も與へん (新)

參拜して庫裡にて休憩、松田巡査は直に歸る。大毎益井氏徳島より追ひ來り居り共に喫茶す。住職今川海嚴氏の談に、同師も本年五六兩月に互り八十八ヶ所巡拜せられ、恰も六月中旬伊豫小松町六十一番香園寺に詣る途中、警官二名追ひ來り住所姓名を尋



昭和九年七月二十九日 於日和佐岡旅館

ね、猶頻りに根掘り葉掘りに身許を調ぶ。夫れが一度ならず二度もありし。其後香園寺にて聞けば尾關老師に似たる怪僧悠々として去ると云ふ新聞記事ありし赴にて、老師御出山直後の、あの大騒の時分に老師と見違へられたものと判明せり。其後國に歸てから宗會議員に打て出よと勸られしも、乃公も縦令へ一時でも東福寺管長に見られし者ぢや、議員なぞに出るものかと云ふてやつたとの事に一座呵々大笑す。

伊豫路にて我とまがひし海嚴師

是も宿世の惡にしなるらん

今川師は至て磊々落々たる人にて、本日は如何なる豫定に候や、都合にて當寺にて緩々滞在ありてはとの事に、實は此處に居らるゝ岡氏と第三番にての約あり、濱屋に宿を定め居れり。兩三日同家に滞在海水浴を致すべく、特に本日は土用の丑の日故、齊後は早速海水浴

に赴く考へなりと云へば、然らば拙僧及寺内の者も御伴すべしとの事、午時濱屋に歸り益井、岡兩氏と齊を共にし、午後一時より藥王寺山主及隨徒數員岡、益井各氏等と

海水浴を爲す。

丑うしの日の潮に入りてのびくと

旅の疲れも消えうせにけり



昭和九年七月二十九日  
土用丑之日午後 日和佐海岸海水浴記念  
右より 谷兵太郎氏 藥王寺主 今川海殿師  
風林行應 圓通寺主 新庄海雲師

磯等實に風景絶佳なり。益井氏は徳島に歸る。晩は來訪者多し。

三十日 晴 藥王寺にて同寺及有志の爲に揮毫。

三十一日 晴 相見者多く揮毫をも爲す。

### 八月

一日 晴 午後藥王師、岡氏、吉野保次郎、谷輯太郎、林幸一、其他數氏と坐談會を開き亨應を受く。蓋し送別の意なり。

二日 快晴 當町有志一同より土佐室戸迄二十二里を、ハイヤにて見送らるゝ事となり、午前九時半岡影明、林幸一兩氏同乗、一同見送の中に發錫す。但し當町迄は草鞋にて來りしも、兩脚共蚊の喰ひ口より腐腫疾患ふしむとなり大に難澁、醫師の勧めもあり、且つは途中にて度々洗足の面倒もあるので當地にて下駄履きとなる。五里餘にて番外海部郡淺川村八阪山鯖生大師に詣す。本尊阿彌陀如來、作者不明。

當山は行基の開基なり。大師遍歴の砌此處に御宿泊靈夢を感じ玉ひ、一七日の御修法ありし満願之日、馬子馬を曳き來るを御覽になり、其の積物を御問に成ると汐鯖なりと答ふ。我に一尾を與へよと曰はれしに、馬子大に罵り去るに、忽ち馬大に腹痛し七頭八倒苦む事甚だし。馬子驚て大師に懺悔し汐鯖を差上ぐ。大師其心を惑み給ひ御加持水を與へ給へば馬の苦痛立處に癒ゆ。大師汐鯖を海邊に持ち行き加持を爲して海中に放ち給へば、不思議なるかな忽ち蘇生して泳ぎ去る。故に鯖生大師と稱す。之を見たる馬子は飄然として發心し大師の御弟子となり、當庵に止住して一生師德報恩に盡したりと云ふ。此處には詠歌なし。依て一首を製し献ず。

鯖もよみがへりぬるあらたかな

鯖生 大師の徳ぞとうとし

又行く事三里餘、穴喰町に入り淨土宗願行寺に憩ふ。衲の知らぬ間に日和佐の有志と當町の有志との間に電話にて相談出來居りし様子にて、直に有志數人驅付來り、本日は是非當寺にて一泊相成度との事なり。衲は急がぬ旅故差支へないがハイヤは如何

にするぞと問へば、ハイヤも一緒に泊りますからとの事に、夫れならばとて當寺に一泊の事とす。

待伏せて我を引止む人々も

道にいそしむ法の友なり

時は午前十一時なり。依て直に海水浴を爲す。此處には水床潟として小さき島數箇點在し風景絶佳、海は最早太平洋に面し水清澄にして心地よき事限りなし。齊後は圓通寺中西師、大日寺木戸師等も來會、揮毫、特に當寺の爲に本堂に大額を書し置けり。午後五時より有志二十餘人集合、坐談會兼歡迎宴あり。此邊より土佐に掛け鰹の名産地なり。處の名物なりとて其の作り身を澤山強らるゝも腥くて喉に通らず、外に食する者もなく是には閉口せり。夫れを見し有志の一人氣をきかし糸ヨリと云ふ魚や鮑を調理し來る、是れは上品にて匂ひも少なく結構なりし。

○

三日 好晴 午前七時一同見送りの裡に發錫、一里餘にて土佐國甲の浦町に入る。町

の中央迄行くと警官二人直立不動舉手して出迎ふ。運轉手は何事ならんと驚き居る間に一警官は自動車に近かより尾關禪師に候はずやと云ふ、然りと答ふれば、室戸署長よりの命にて歓迎仕りしなり、何か御用ども無之やとの事に、別段用も無しと答ふば、然らばとて舉手して去る。又數里夫婦岩と云ふあり海岸に數丈の奇岩揃ふて屹立



昭和九年八月三日 通過の際記念撮影  
土佐室戸より三里位東の夫婦岩也

す、頗る偉觀なり、岡氏撮影す。午前十一時室戸崎の大師修法の窟に着す。拜し居ると又々警官二人來迎す。但し阿波日和佐より此處迄は十二里の難路にして、八阪八濱の嶮路、飛び石跳石、ゴロ／＼石とて、波の引くを待つて石をつたひ岩角をよぢて通行する難處多かりしに、今は道路開け自動車にて僅か五六時間にて達するは全く聖世の賜と云ふべし。

名にしをふ八阪八濱も車にて

室戸みさきに早やつきにけり

夫より上り八町急坂なり、途上警官注意して曰く、當寺住職は重き肺患にて病臥中故寺にては茶一杯も召上らぬ様との事、やがて土佐國安藝郡津呂村

第二十四番、室戸山最御崎寺に詣す。本尊虚空藏菩薩、大師作。

明星の出でぬる方の東寺

くらき迷はなどかあらまし

(舊)

明星の壇にかゝやぐ東寺

遍く照す人の世の間

(新)

却説、寺に參れば本堂は蜂の巢退治の爲、危險故近かよるべからず。本尊は大師堂に合祀しあるとの立札あり。止むなく大師堂に參れば、是は如何に大師堂は恰も物置き同然にて御話にならぬ亂雜さ、如何に住職病中とは云へ餘りの事と思ひつゝ、禮拜了て納經の爲庫裡に赴けば、是は如何に、清掃行き届き、塵一本止めぬ有様、實に其顛倒振には一驚を喫す。境内展望臺あり、高さ六十尺七階にして好位置にあり、是に昇り

て大観す。脚下千年の老樹鬱蒼たるに、山下は海岩にて奇岩怪石獅子の踞するが如く虎の嘯くが如きに、南海の波濤滂湃として打ち寄す。眸を放てば渺茫水天彷彿の南洋にて無限際の大觀全く天空海澗の絶景なり。大室戸の雄大豪壯なる風光は此處に登りて始めて賞する事を得ると云ふべし。

来て見れば聞きしに勝るながめかな

室戸みさきの濱の景色は

次に一里半同郡、室戸町大字室津

第二十五番、寶壽山津照寺通稱津寺に詣す。本尊地藏菩薩、大師作。

法の船入るか出づるか是の津寺

迷ふ我身を乗せてたまへや

(舊)

法の船出るも入るも此の津寺

思ひ迷はず乗りて進めよ

(新)

本日は特に大般若會の準備中なりし、納經に赴けば住職出て來り、親切に一宿を勸

められしも、同伴者も多く、且つ大般若にて非常に混雜の模様にも見受けし爲、厚意を謝して寺を下れば、岡氏警官と相談して當町にての一等旅館油屋に宿を定め居り、遍路にはちと不似合なるも既に定め居る事として是に入る。家は中々立派なるも二階は先客ありとて下の奥座敷に請し入る。此座敷普請や裝飾には申分なきも裏手に隣家接近し居り、風通し悪しく蒸暑き事甚しく且つ隣家には味噌搗きをなし居り、高聲にて頻りに味噌搗歌をうたふ、其の暑くるしきこと夥し。

やれくくと汗ふくひまも裏庭に

味噌つき歌のひま、く油屋

矢張り夏の宿は、龜末でも、風通しよき座敷に限る。併し此の家、女中等も至て慇懃に一家舉て商賣氣離れて歡待し呉れしは満足なり。林幸一氏は此處より日和佐に歸る。戒浴し岡氏と晚餐を喫し居ると室戸署長松浦定爲氏、齒科醫北村氏等來訪、揮毫を依頼せられ數枚筆を執る。松浦氏曰く、我が舍弟眞言僧となり是より十數里西の香美郡岸本町寶幢院に住し居る、豫て老師御來錫の節は直に通知し呉れ、是非兩三日滯



在を願ふと申居る故御立寄あり度しとの事。

松浦のぬしのはらから寶幢の

寺のあるじと聞くぞ嬉しき

○

四日 好晴 バスにて、三十町坂路五町、同町大字元。

第二十六番、龍頭山、光明院、金剛頂寺、通稱西寺に詣す。本尊薬師如来、大師作

往生にのぞみをかくる極樂は

月の傾く西寺のそら

(舊)

日の出る東のあるじ薬師尊

誰が西寺と言ひそむるらん

(新)

蓋し二十四番最御崎寺を東寺と稱するに對して當山を西寺と呼びしなり。當山の本尊は薬師如来の坐像なるが、大師一刀三禮、丹精を凝らして彫刻せられ、尊像に向て尊像支體すてに備へまいらせたり、行きて坐し給へかしと念じ玉へば、尊像自ら立て

厨子に入り給ひしと傳ふる靈像なり。大師堂、納經所等は本堂より全く離れたる處にあり。納經に赴けば、住職及隨身は先づ座敷にて休息せられよと請せらる、風通しよき座敷にて西瓜等を供養せらる。此の山頂にて西瓜を受くるは珍しと云へば、此の山腹に澤山出來るとの事なりし。夫より山腹を辿り下る事十四町、縣道に出てバスにて七里半、午前十一時神峯寺の登山口なる、同郡安田町字唐濱の濱吉旅館に着し、點心を爲す。

此れより神峯寺へは急坂一里の險路にて、日中には到底上りがたき故夕景涼しくなつて上り、山上にて通夜すべく定め夫迄休息する事とす。岡氏は一里後戻した田野町に日和佐町出身の知人あるとて赴きしが、午後四時頃其知人なる日和佐重治氏と共にハイヤにて迎へに來り、今夕は田野に後戻りして日和佐氏方にて一泊なされ度との事に旅館を引上げ、同乗して田野町に歸れば、夫人千代惠姉始め、同町婦人會の幹部兩姉等交々歡待せらる。

田野の里日和佐の主やもろ人の

厚き心に疲れやすめん

日和佐氏及び町有志より、明五日晚一場の講演を依頼あり、今回は公開講演なぞはせず巡拜專一の考へなりしも、阿波以來既に座談會は至る處にて爲し來りし事、小人数に法悦を與へるも多人數に說法するも五十歩百歩であるし、大師も又廣く法施をする事は喜ばるゝに相違ない事と考へ是に應諾す。明朝は午前三時ハイヤにて山麓迄行き登山する事とし解定す。

○ 五日 大晴絶天 午前三時、岡、日和佐兩氏息女等とハイヤにて約一里山麓に達し、神峯寺に向ふ。懷中電燈をたよりに急坂を登る。

朝まだき燈とりて分のぼる

神の峯寺の路のけはしき

午前四時半寺の門前より先づ二丁餘の神峯神社に詣す。境内は鹽屋が森に在り、全山老杉鬱蒼極めて森嚴なる境地なり。祭神は大山祇命で相殿に天照皇大神、天兒屋根



昭和九年八月五日 上佐於神峯寺  
第二十七番札所 (風林軒)

り。

見渡せばひろのみさきのかなたより

輝き昇るあさひうらゝか

第二十七番竹林山神峯寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、行基作。

三佛のちかひの心神の峯

やいばの地獄たとひありとも (舊)

三佛の靈光は崇し神の峯

深きやみじも照し破らん (新)



昭和九年八月五日  
土佐國第二十七番 於 神峯寺  
右より 同寺住職 岡影明氏 風林軒 日  
和佐 日和佐重治氏

講演を願ふとの事、既に當町にてもする事故伸べたるは縮めず、一なさいれば二休せずちやと承諾し、七日夕に高知に入る故其晩に約す。午後は揮毫や來訪にて忙し。同八時より福田寺にて四恩の説及巡拜の感想等の題にて講演す。聴衆五百餘人堂の内外に溢る。盛夏の事とて汗も甚しく、蚊も多きに拘らず至て靜かに聴聞す。

汗も蚊もいとほでつとふ人々の

道を求むる心嬉しも

但し六月以來始めての公開講演なり、當福田寺は浄土宗西山派に屬し、住職は森心隨師と云ふ中々の大地にて、境内に維新勤王二十三士之墓あり、大略を記すれば、嘉永癸丑以來、外警の事起り、同地の郷士にして勤王家、清岡道之助成章、武市瑞山を盟主とし國事に執掌す。文久三年瑞山先づ藩獄に下る。同士二十三人、藩論の姑息にして、志士を壓迫するを慷慨し、翌元治元年藩廳に上書せしが、用ひられず、同年七月同志二十三人、野根山に屯集し、更に改革を建議す。藩以て黨を結び叛を謀るとなし、兵を發して討ち、遂に阿波の牟岐に於て、捕史の爲縛に就く。九月五日同志悉く奈半利河原に斬られ、後皆福田寺に葬らる。後何れも贈位の恩命を受く。明治三十年紀念碑を境内に建て、時の知縣石田英吉の撰文を刻す。更に昭和四年十一月、濱口雄幸氏の揮毫にて「二十三士殉節之地」と題したる紀念碑を刑場たりし奈半利河畔に建つ。寺より約三丁の處なり、親しく回向し英靈を慰め日和佐家に歸り宿す。本日岸本寶幢院より電話あり、明六日午後立寄の事に返事す。

六日 快晴 午前中、福田寺和尚、外數氏來訪揮毫を爲す。午後三時田野町有志の接待のハイヤにて岡氏 日和佐氏 婦人會代表二人等、隨伴約八里香美郡岸本町寶幢院に向ひ午後五時着す。住職松浦祥雲氏外、中之院野島芳觀、山田高野寺高木大鑑兩師及信徒多數出迎、田野より見送の人々は紀念撮影して田野に歸る。午後八時より本堂

にて法話す。來會百餘員、今夕高知護國禪道會よりの專使三谷宗慧士來訪、同會々員の爲に提唱の依頼あり、依て九日の晚臨濟録中四料簡を提唱する事にし、同士は歸高す。

七日 午前八時ハイヤにて寶幢師外三名同乗發錫約二里野市町にて、吉祥寺惣代二名出迎し居り相見し、又一里香美郡佐古村



昭和九年八月六日  
高知縣日野町有志連 岸本寶幢寺に送來  
歡迎者を一同撮影す

第二十八番法界山大日寺に詣す。本尊大日如來、行基作。

露しもとつみを照せる大日寺

などか歩あふをはこばざらまし

(舊)

ありがたや幾世重ねし罪とがも

霜ときえぬる大日のてら

(新)

此處にて休息中山田より高木師及信徒河村某、近森氏等出迎あり、依て寶幢院より見送の人々に袂別し山田町高野山別院に着し點心を受く、高木師は大坂浦江聖天了徳院故釋大眞師の徒弟にて、同師青年時代よりの知合なり、昨日寶幢院にて會見せしは三年振りなり。實に奇遇の感深し。

ゆくりなく法の友にぞ逢ひにける

我が喜は何にたとへん

同師に本年六歳の少女あり、衲は暑さの砌りとして何心なく、つか／＼と奥に通じ、法衣を脱し居りしに、其の前に來り、慇懃に手をつかへ挨拶をせしには一寸面喰ひた



り、夫より納の給仕は一切其の少嬢の受持にて、母堂や手傳の人が差でると大變御氣嫌が悪いと云ふ勢で、仲々恰利發才なり、「十で神童、二十で才子、三十すぐれば並の人」と云ふ歌もあるが、此の子の將來如何なるものか。

午後三時、高木師、河村、近森兩氏等隨伴ハイヤにて約二里長岡郡國分村。

第二十九番摩尼山國分寺に詣す。本尊千手觀世音菩薩、行基作。

國を分けたからをつみてたつ寺の

すへの世までの利益のこせり

(舊)

人皆の心の中の摩尼寶珠

千手の慈悲に光り増すらん

(新)

當山は伽藍も整備し居り、中々大地なり。住職林快因師、新書院に請し茶菓の亭あり、當寺には約二里を隔つる大篠村福重嘉吉氏妻繁尾と云ふ老嫗、三日前より毎日大なる西瓜を負ふて來り。境内の井戸にて冷し納に接待せんとて待居りしと云ふに逢ふ。恰も其の檀那寺なる眞言派の大徳寺和上も來り會はされ一同にて紀念撮影す。此迄名



昭和九年八月七日  
於土佐第二十九番國分寺 紀念撮影 右より  
大徳寺和尙 高木和尙 風林軒 國分寺和尙

も知らざりしに奇特の人もあるものなり。後に大徳寺の請に赴きし時、其家に立寄り祖先へ回向しつかはせり。

かくまでに我を慕ふも法の爲

やがて悟りの道に入るらん

さて第三十番は一の宮善樂寺と、高知市安樂寺とが本家争をなし居り、土佐に入るより、各札所に互に我が方が眞の三十番札所なりとの廣告めいたものあり。

甚だ苦がくしく感じて居つた。其経緯を寫真大觀より抜粹すると、明治三年廢佛毀釋の際先づ神宮寺を廢して善樂寺に合併し、續て明治四年善樂寺を廢するに至れり。その時善樂寺本尊印度渡來の秘佛(金佛身長八寸)及び弘法大師の尊像、其他寺寶の總てを二十九番國分寺に預けたのである。國分寺に合併と同時に納經も同寺にて二ヶ寺分を押捺せり。其後明治九年、高知市安樂寺より國分寺に懇請して前記印度渡來の秘

佛を遷し三十番靈場として今日に及べり。其後明治二十年頃より一の宮村にて善樂寺の再興をはかりしも機運熟せず、日月を經過せしが同村出身山本光之氏發起となり實に三十餘年、東奔西走の結果昭和四年埼玉縣與野町に在りし東明院を移轉し、同年十一月善樂寺と改め佛像及寺寶は國分寺より遷座、昭和五年二月二十四日落慶式及入佛式を盛大に擧げ、茲に三十番善樂寺は復興し本善樂寺と稱してゐる云々、衲一首あり。

元よりも十方無碍の御佛を

本家争ひ無益なりけり

衲は何れを本家とは斷ぜぬ、善樂寺は元の靈場で因縁深き境地即ち大師の靈跡故參るべく、高知安樂寺は御本尊がまします故參るべく、三十番と云ふ番號に捉はれねばよいのである。國分寺より一里半、土佐郡一の宮村。

第三十番、百々山善樂寺本尊阿彌陀如來。

人多くたちあつまれる一の宮

昔も今もさかへぬるかな

(舊)

神み佛け誓ひにつどふ一の宮

みのりの光り彌やさかゆらん

(新)

當山は今復興中の事として、堂宇は至て貧弱なるも、村民の熱誠なる信仰心は、やがて壯觀を復する事と察する。隣に國幣中社一の宮土佐神社あり、參拜す。祭神は大己貴命の子、味耜高彥根命、或は一言主神とも云ふ、鼓樓は元三十番の鐘樓、樓門は元三十番の樓門なり、廢佛毀釋の際に、神社に領せられしなり。

扱豫てより高知市中島町高野寺谷信讚僧正より、高知市に來られたら緩々滞在あれとの書面來り居り。高木師にも懇々の傳言もあり、今夕は高知新聞社樓上にて法話の約もある事として直に高野寺に向ふ。約二里、午後五時同寺に着す。山主及信徒惣代猪野馬太郎氏夫妻、令嬢和子等交々歡待せらる。

温き心の主の信讚師

我もくつろぎ疲れやすめん

當山は遍照山高野寺と稱し、明治十五年十一月二日、本縣信徒等祖先追福及永代説

教所の爲創立せしものにて、高野山上藏院（よしのへ）信須阿闍黎（しんす）の開基にかゝり、明治三十年大師堂、同四十三年仁王門を新築し、現住信讚師に至て益々隆昌となり、本年は大位牌堂を完成せられ、初冬には盛んなる法要を営まるゝの準備中なり。師は又救護事業、教育方面等種々盡瘁し居られ、高知縣に於ける重鎮なり。又國家の元勳板垣退助伯の誕生地は當寺境内にて、大正十三年其の記念碑を本堂の前に建立す。

午後七時より高知新聞社樓上にて寒時寒殺闍黎（さむし）熱時熱殺闍黎（あつし）の題にて一時間餘の講話をなす。講堂僅に五百人を容るゝに過ぎず、聴衆澤山詰掛、入場謝絶の爲に大混雑を呈せりとの事なり。さすがに土佐は言論の盛んなる處丈けに講演會などは他國より集りよきならん、同社は本年にて創刊三十年となり、其の記念に各名士より詩歌等を請ひ集めたる旨にて衲にも求めらる。一絶を草し揮毫して贈る。

辛苦經營三十年 堂々論旨壓他鮮  
欣看國步多難際 社運隆々絕比肩

○

八日 高知新聞より自動車を廻され高木師、岡氏同乘市内江の口町。

第三十番百々山安樂寺に詣す。本尊阿彌陀如來、元善樂寺の本尊なり。由來は善樂寺の處にて濟みし故省略す。住職にも面會し、夫より約四里再び山田町高野寺に着し

揮毫等を爲す。山田警察署長、西岡隆福氏等相見多し。午後八時より同町學校講堂にて禪とは何ぞやの題にて一場の法話を爲す、來會貳百餘。晴時雨。

○

九日 午前中揮毫等を爲し、午後二時五十分の汽車にて三時半高知驛に着。土佐護國禪道會よりの出迎にて井口城山下、護國道場に着す。當道場は故大德寺管長松雲老師の居士大姉が多年苦辛して漸く建設せしもの、現在は



昭和九年八月八日 於高知市高野寺  
前列右鳳林軒行惠 左高野寺山主谷信讚僧正

松雲老師の法嗣、前妙心管長神月徹宗師年兩三回來錫提唱接心等あり、今回衲の巡錫を好機とし特に一回の提唱を請はれしなり。現今にては道場も中々完備し三谷宗慧禪



昭和九年八月九日 於高知市國國會

士外一員在錫す。本日野市町吉祥寺檀徒にして長らく東福寺に寄留し居りし佐野馨山畫伯、同寺檀信徒一同を代表し來り、何とか繰合、是非同寺にても一場の法話を願度との事、幸に十一日大篠大德寺に赴く事故十二日立寄る事とす。午後七時より臨濟錄四料簡を提唱す、來會五十餘員。會員には法曹及縣役員も多く、其中刺を通じ特に相見の人衛生技師關谷房春、田所元喜、向坂菊枝、濱口琴子、松村楨子、岡本、諏訪、甲藤、和田、阪本、西岡等の諸氏也。本日突然京都東福寺僧堂より納の會下たりし林徹道上座、井上多聞上座、宮崎憲道上座の三人納を慕ひ來る。不得止十六七日頃迄在高を許す。徹道上座一律を賦して呈し來る。

謹而奉鳳林軒老大師

聖賢應世人天、表拂袖飄然下洞房、  
一會禪流追德走、六齊士衆索師羅。

餘香猶在獅王座、形影已空選佛場、  
寄語那邊消息子、休論是非絕思量。

本日三十三番札、雪溪寺住職山本大岳師來訪講演の依頼あり、十五日參詣し十六日講演の事に約す。猶道聞兩上座を先驅に赴かしむる事も協定す。

十日 午前中揮毫、午後四時高野寺に歸り、午後八時より同寺にて四國巡拜の動機と感想の題にて講演す。參聽者堂に溢る。本日道聞兩士は雪溪寺へ、憲道上座は佐野氏と共に吉祥寺に遣す。晴。

○ 十一日 晴、今朝岡影明氏阿波に歸る、同氏は先月の末、阿波日和佐着以來終始一貫隨伴補佐し、足部の腐腫の介抱やら、處々にての記念撮影やら全く肉親も營ならぬ懇切を盡され、且つ氏は寫真大觀の著者にて、昨年親しく巡拜せられし事とて地理にも委しく何かと都合よく、本人も猶何處迄も隨伴致度企望なりしも、家事の都合最早其



時日を許さず、止むなく徳島にての再會を約して此處に名残り惜しき袖を分つ。

道るん、と阿波の國より村添ひて  
我を守りし心ゆかしも

同時に、長岡郡大篠村眞言宗大徳寺住職佐竹弘光師

迎に來り、高木師隨伴

ハイヤにて四里程大篠

學校に着し、六年生以



昭和九年八月十一日 於高知縣山田町高野  
別院 右より二人日高木大鑑師 風林軒

上及び高等部の生徒等二百餘員に一場の法話を爲し、夫より人力車を連ねて十町餘、福重嘉吉氏方に立寄り佛壇に回向し一休す。但し先日大日寺にて繁尾老嫗に面會せし際の約を履みしなり。當家は石灰を商ひ中々の殷盛なり。大徳寺は背後の山手にあり、同寺に着す



昭和九年八月十一日 大篠村 學校にて講演  
了り同村大徳寺に向ふ途中 前より  
大徳寺佐竹弘光師 風林軒 高木大鑑師 岡影明氏

れば寶幢院松浦師、中之院野島芳觀師も來會、齊後揮毫等を爲し午後八時より本堂にて法話す。來聽百餘員。

○

十二日 吉祥寺より迎へ來りハイヤにて約二里同寺に着す。當寺は土佐に於ける東福寺派二ヶ寺の中の一ヶ寺にして、山腹の至て眺望よき處にあり。土佐十景の一になり居るとの事なり故武田無著尼の開創にして寺觀完備し居るも住職は病氣出養中にて不在の事を聞及居り、且つ前以て何等申來り居らざりし爲先日立寄らざりしなり。其後惣代北村一正、川村一久、關田某等、佐野氏と協力し切なる懇請に立寄る事にせしなり。現在は曹洞宗の甲斐哲宗なる人及び無著尼以來隨身の春子婆等留護し居れり。惣代關田氏の令嬢増子外兩名接待に勤む。午後八時より方丈にて法話す。當村は無著尼以來訓練行届き居るやにて聽衆男女席を分ち整然として坐し靜肅に熱心に聽聞せしは眞に心地よかりし。

○

十三日 安藝郡西分村真言宗中之院野島芳觀師、寶幢院松浦師外惣代二名來迎、高木師、岡村氏隨伴、同十一時半中之院に着す。但し高知より十餘里東へ後戻せしなり。午後は揮毫、同八時より和食小學校講堂にて法話す。來聽參百餘員。

○  
十四日 快晴、午前八時高木、松浦、佐竹、野島の各師隨伴ハイヤにて地藏堂に立寄り誦經、堀川全明尼、外信徒の心盡の茶菓を喫し休息。此地藏尊は靈驗顯著にして近郷近在の信徒、常に雲集すと云ふ。同十時再び野市吉祥寺に入り揮毫等を爲す。赤岡警察署長、玉木義雄氏、山田の河村、田村兩氏其他來訪多し。

○  
十五日 午前八時高木師、田村氏道上座等同乘ハイヤにて約三里、順路の都合にて先づ長岡郡十市村字峯山、

第三十二番、八葉山禪師峯寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、行基作。

靜かなる我がみなもとの禪師峯寺

浮ぶ心は法のはやふね

(舊)

靜かなる心のすがた禪師峯寺

動くも法の道とこそしけれ (新)

當山は登り四町の急坂にて、海濱に特立せし丘峯にあり。岩石奇怪、天笠補陀落山に似たりと稱せらる。其南方眺望最も佳なる所を月見崎といふ。西南には浦戸港を控へ居る所から藩主浦戸出帆の際は必ず此觀音に海上の安穩を祈りしと云ふ。世に此を船魂の觀音と稱し一般の尊崇篤し、山を下り又一里半、上り八丁の裏坂の嶮を辿り、長岡郡五臺山村、

第三十一番、五臺山竹林寺に詣す。本尊文殊菩薩、行基作。

南無文珠三世諸佛の母ときく

われも子なれや乳こそほしけれ (舊)

南無文珠三世の佛けの師と仰ぐ

我にも分て智慧の光を (新)

當山は中々の靈山大地にして本尊は日本三文珠の一なり。三文珠とは丹後の切戸の文珠、大和阿部野の文珠と當寺の文珠とを云ふ。創建當時は離れ島なりしも今は高知市より陸續きとなり居れり。五峯聳立して唐の五台山清涼寺に似たるを以て五臺山と名けしと傳ふ。納等は裏坂より登り表坂に下りしなり。裏坂は急坂にて峻峻なるも、表坂は高知市の公園となり居り道路も迂曲して緩かなり。頂上に眺望臺あり、是れに上れば眼下に繪にも勝れる浦戸灣を見下し、東は水天彷彿の間に室戸岬西は足摺岬を眺め風光極めて雄大壯麗なり。

見渡せば室戸足摺うす黒繪

五台の峯に心のびく

公園を見物しつゝ下ればハイヤ待ち居り、高知市を迂廻し約二里、吾川郡長濱町字長濱、

第三十三番、高福山雪溪寺に詣す。本尊薬師如来、雲慶作、脇士は堪慶作。

旅の道うへしも今は高福寺

のちのたのしみ有明の月

(舊)

法の蹊たどる我身は高福寺

真如の月は何時もほがらか

(新)

當山は弘法大師の開基にして種ヶ崎に居られ、此寺を開基せられたりと傳ふ。其時に作られしと云はれる御座大師は今尙ほ當寺にあり。當寺は元眞言山高福寺と稱す。後一旦高福山慶雲寺と改めたが永祿の頃、長曾我部元親公、禪臨濟宗に改む。天正年間、元親浦戸移城の後、城下唯一の名伽藍で一般の歸依頗る篤かりし。慶長四年元親卒するに及び、當寺を菩提所とし遺骨を寺の南方天甫寺山に葬り、木像を安置し位牌を立て法號により寺號を改めて高福山雪溪寺、又は小林山雪溪寺と稱し僧月峯を中興開山とす。明治初年神佛分離の際慶寺となり、元親の木像も秦神社に遷した。明治十二年十月再興を許可せられ同四十四年境内を擴張し、本堂その他の堂宇を再建した。朱子學南學派の祖とも云ふべき僧天室は當山の世代で、その弟子に谷寺中があり、寺中の弟子に小倉三省と野中兼山とが出た雪溪寺は、實に南學發祥の道場ともいふ可き

所なり。現住職山本大岳師。本月九日護國道場に來訪、講演の依頼ありし事とて直に  
 隠寮に入て休息す。高木師其他野市より見送の人々は直に歸去す。高知より中西宗晋  
 氏等來訪す。禪寺にて平生の習慣に合致する事とて何事も便利よく且つ道聞道の三士  
 も隨ひ居る事なり、大に寛ろぎ休息す。名古屋日暹寺の現董山本玄峯師は當山の先住  
 なり。

○  
 十六日 快晴 午前九時山本方丈の案内にて一同桂濱の絶景を賞す。桂濱は太平洋に  
 面し、奇岩怪礁交錯し月の名所として名高く、岬頭に老松二三、その基に龍宮神の小  
 祠あり。高雅な神橋と參詣道が一段と風致を添へてゐる。岬に維新の元勳、土佐の英  
 雄坂本龍馬の銅像が最近建設せられてある。龍馬は少壯江戸に出て劍法を千葉周作に  
 學び、武市瑞山の土佐勤王黨に加はる。又勝海舟に就て航海々戰の術を修得す。慶應  
 元年薩長の間を奔走し其の聯合を成立させ、小松帶刀、後藤象二郎等と王政復古に盡  
 瘁した。後藩主山内容堂が大政奉還を將軍慶喜公に勧めたのも龍馬の進言其の基を爲

す。慶應三年十一月十五日夜、京都河原町で同志中岡愼太郎と共に、近藤勇等の暗殺  
 する所となる。年三十三。明治二十四年正四位を贈らる。暫時休息觀賞して歸る。齊  
 後揮毫。午後八時より遍照金剛の題にて、一場の法話を爲す。聽衆堂に溢る。

○  
 十七日 晴 午前八時の船にて京都より松下自性姉來訪す。午後三時雪溪師及三上座  
 松下姉等と高知市高野寺に歸る。但し脚部の蚊腫中々癒えず。高野寺僧正及信徒の猪  
 野氏等、脚部の癒ゆる迄是非滞在靜養あるべしと懇切に勧めらる。依て當分勞煩に成  
 る事に致せしなり。晚汲江寺寰海和上、須崎町外野見の江雲寺關海和上等來訪。

○  
 十八日 快晴 早天吾川郡伊野町青年會員來り講演を請ふ。明十九日晚の事に約す。  
 午後三時の船にて松下姉及三上座等歸京す。

海山を超えて訪ひ來る人々の

眞こゝろなどかあだに思はん

十九日 谷山主の案内にて高木、佐竹兩師も隨伴、城山公園天守閣に上り觀望を恣にす。夫より土佐神社に詣し、高木師の依頼にて高知新聞主筆楠瀬如龍氏の病床を訪ふ。氏は高知新聞の柱石なるのみならず新聞人としては希れなる人格者、未だ知命に達せぬ位なるも昨年來肺炎を患ひ床中にあり、衲に相見に來り度きも身體不自由の爲大に遺憾に思ひ居らるゝとの事に特に病床を見舞ひしなり。氏は大に喜び床上に安坐し快談縱横せり。惜しき人物なれば何卒恢復せしめ度ものなり。午後六時伊野町より上田虎次氏外一名迎に來る。谷僧正及び國清寺和尚等も同乘、伊野町學校に着し講堂にて法話を爲す。參聽堂に溢る。伊野警察署長岡本富繁氏等相見、了つて高野寺に歸る。

二十日 晴後時雨 午前八時豫て國清寺和上の依頼により電燈會社樓上にて社員一同に法話す。同社中直樹氏最も幹施す。同十一時より濱口、嶋之内兩姉の主催にて谷僧正、猪野夫人令嬢等と船にて千松公園に赴き終日清遊、夕景歸山。關谷房春氏來訪

氏は尺八に湛能故一曲を奏して旅情を慰めらる。

二十一日 早天、吾川郡仁西村青年團員二名來り講演を依頼す。二十二日赴くの約を爲す。午前八時大阪より西岡清光、柳延胤の姉弟來訪、晴。

二十二日 晴 午後三時の船にて柳、西岡兩氏歸阪。午後五時仁西村より迎に來る。大西正言氏隨行す。氏は警察出身にして道德教育に盡瘁し居る奇特の人なり。約四里仁西村岡本豊氏方に着し、午後八時より小學校講堂にて法話、青年團、處女會を主とし聽衆堂に溢る。岡本家に泊す。

二十三日 好晴 朝、青年團、處女會の幹部十數名と坐談す。當地青年團、處女會の秩序整然且つ熱誠なりしには感じ入れり。同九時片山青年團幹事隨伴、一同見送りの裡に出立、吾川郡秋山村第三十四番本尾山種間寺に詣す。本尊藥師如來、百齊佛工の

作。

世の中に播ける五穀の種間寺

深き如來の大悲なりけり

(舊)

世の爲に播ける五穀の種間寺

皆御佛の慈悲と仰げよ

(新)

種間寺とは大師唐より持ち歸られし五穀の種を初て蒔かれたから今の寺號を殘されしと云ふ。當寺は又本尾山朱雀院と稱し、人皇三十代敏達天皇の六年に百濟國の皇子が、佛工及寺匠を貢した事は國史に明にして、其後第三十一代用明天皇の朝大阪四天王寺が落成し、其佛工等故國へ歸る途中風波に遭ひ、土佐國吾川郡秋山の港に寄港し海上安全の爲め本尾山に座像四尺八寸の藥師如來を彫刻し、安置して堂宇を建立せしと云ふ。住職親切に茶菓を供せられ一休し、午前十一時高野寺に歸る。午後五時より惣代猪野馬太郎家の請に赴く。森田彰一氏も來會。夫人春子、令孫和子嬢等大に歡待せられ、當家に泊す。

猪野の主春子の君のもてなしに

時のすぐるもをばえざりけり

氏はシヤポテンを愛植し居り、三百餘種の珍異なる種類を拵集し居らる。實に見事なりし。

二十四日 晴 午後猪野家より高野寺に歸る。晚市内北門筋大西正言氏方にて一場の法話を爲す。來聽者は多く縣廳の人なりし。

二十五日 晴 さて足部も大體癒えし故明日出立巡拜の事とす。爲に來訪者多し。

二十六日 午前七時高岡町より代表二名ハイヤにて迎に來る。谷僧正、大西氏、猪野和子嬢等隨伴、高野寺を辭し清瀧寺に向ふ。高岡町を通り抜け山下にて下車(約五里)徒歩十丁餘、山麓に清瀧寺住職伊藤象岳師出迎あり。急坂八丁、高岡郡高岡町字清瀧

第三十五番醫王山清瀧寺に詣す。本尊藥師如來、行基作。

九六

澄む水を汲むは心の清瀧寺

波の花ちる岩の羽衣 (舊)

源の澄める心や清瀧寺

眞如の月の影やさゆらん (新)

當山は醫王山鏡地院清瀧寺と稱す。千二百餘年前、元正天皇養老年間に行基菩薩の開基し給へるものにて、脇士の尊像は悉く運慶の作なり。大師巡錫の砌、三密瑜珈の道場と定められ、續て平城天皇第三皇子高岳親王(眞如親王の事)御留錫遊ばされ、紀念の五輪塔を御建立なし給へり。親王は一旦皇太子に立たれたが、弘仁の亂に廢せられ、後専ら佛道に入り弘法大師の法弟となられ、貞觀三年土佐に下向され、此寺に修法されし時建てられたのが此五輪塔である。高岡の號も親王の御名から出たものゝ如く、外に此附近に玉田、奥屋敷、御所の内、王ヶ崎等の地名もあると云ふ。かくて親王は貞觀四年求法の爲入唐し、後渡天の途に上られたが、羅越國で虎害に遭ひ給ふと

云ふ。

古への眞如親王逆修の

御跡仰ぎていとゞなづかし

齊後は揮毫を爲し、特に山主の依頼にて眞如の二字を大額に書し置けり。午後六時下山、二十五丁高岡町白石旅館に入る。但し講演は町にてする事とて寺に歸り宿る能はず、不得止旅館を要せしなり。同八時より劇場昭和館にて時局と佛教の題にて講演す。聴衆八百餘人。了つて高野寺谷僧正及び猪野嬢は高知に歸らる。納等は白石旅館にて有志の響應を受く。清瀧山主及び高岡高等小學校長三好寛、小學長西田信五郎、高岡警察署長市岡榮徳の各氏相伴、一同歡を盡す。

○ 二十七日 晴 早天宇佐青年團より代表三名迎に來る。大西正言氏隨伴、凡そ三里宇

佐町大和屋旅館に落着く。此處より三十六番に參るには御免の渡しを渡り二十五丁徒歩して參るか、船にて海上一里、寺の麓に渡りて參るかの兩道あり。依て青年有志の

九七

勸により小發動船にて渡る事とす。午前十一時出船、然るに中途より風起り波高く小船は木の葉の如く飄弄せられ、海潮のシブキは一同の頭上より降りかゝる。實に危険千萬にて今にも顛覆せんとする。在様なれば一同色を失す。納曰く、波切不動に參るのぢや。此れ位の波を切るのは當然、各々不動の精神で居られよ、是は全く不動尊が我等を驗み居らるゝものなりと。漸くにして岸に着き、高岡郡宇佐村字龍第三十六番獨鈷山伊倉那院青龍寺に詣ず。本尊波切不動明王。

わずかなる泉にすめる青龍は

御法守護のちかいとぞ聞く

(舊)

波風を静めてすめる青龍は

御法を守る誓なりけり

(新)

當寺は大師唐より歸朝の砌り、密教弘通の地をトせんと獨鈷を投げ給ひしに、今の奥の院の松の梢に懸り在りしより當寺を開き給ひ寺號は唐の青龍寺を移させ給ふ。更に海底に波切不動明王の尊像を刻み、風波の難を除き給ふ等靈驗著しき處なり。依て

海運業者は特に信仰す。歸途は如何すべきやと一同躊躇ひしも、納は矢張り船にて歸ると主張し又々船にて宇佐に歸る。往きよりは稍波穩かなりしも中々に嶮しかりし。

波切の不動の誓ひいやちこに

此荒波も乗越ゆるなり

右左り船はゆらぎて潮しぶき

衣の袖もしぼる斗りに

午後は揮毫、晚八時より學校講堂にて法話す。參聽四百餘員。本日須崎より電話あり、何時須崎を通過せらるゝやとの事に、晴天なれば明二十八日通過する旨答へしめしに、是非一泊し講演を請ふ旨申來る。

さて次の札所、窪川寺迄は十九里半、其中須崎迄の間に八阪八濱の難處徒歩すれば七里あり、海路を行けば横波三里とて一名御免の渡しと云ふを渡れば、七里の難路も僅かに三里にて中島と云ふ處に着す。故に大師も此の海路を御免しありしとて、御免(ごめんの)渡しと名けしと云ふ。明日は青年團にて、特に發動船を仕立て、見送ると



云ふ。

100

二十八日 快晴 午前八時、宿所大和屋主人益田久萬吉も随伴する事となり、青年團幹部六人と一行九人にて發動船にて須崎に向ふ。發船に當て日和佐氏夫妻來訪す。但し田野以來なり。横波三里は浦の内村の入江で宇佐町が其入口になる。海水是より西方三里灣入す。兩岸の青山或は逼り、或は開き、綠樹は淡碧の海に倒映し、實に風光明媚なり。殊に扇岬アサヒノ岬は最も絶景なり。秋の紅葉の頃には高知其他より遊覽の客多しとの事、灣内に眞珠の養殖場あり。

水は澄み山は緑の横波の

船路はいとゞ樂しかりけり

約一時間にて中島に着けば、早くも須崎より發生寺主佐藤龍洞師、須崎町長馬淵重馬氏、須崎警察署の部長一名等ハイヤにて迎に來り居られ、此處にて宇佐より見送の一同に別れ出迎の人々と同乗し、約二里須崎町浄土宗發生寺に着す。午時町の有志二

十餘人と坐談し會食す。野見江雲寺關海師、其他寺院數師、町長、警察署長能津縫吉氏等も會す。

もろ人の菩提の心發生寺

皆御佛の恵みうくらん

午後は揮毫 八時より學校講堂にて講演す。來聽參百餘員。

二十九日 午前八時發生寺發錫に際し、高知より谷僧正當地に法要に來られし序にて來訪せられ門前にて相見、此處にて愈々拜別となる。夫より十餘里ハイヤにて高岡郡窪川町に着す。岩本寺主窪惠亮師出迎あり。恰も時雨なりし。貳町餘第三十七番藤井山五智院岩本寺に詣す。本尊阿彌陀如來、藥師如來、地藏菩薩、觀世音菩薩、不動明王の五尊にて皆大師の作なり。蓋し舊五社の本地佛五體を祀られしなり。故の五社は今は縣社で、高岡神社と改稱せらる。寺より十八町去れる仁井田にみいたにあり。

六つの塵五つのやしるあらわして

101

ふかき仁井田の神のたのしみ (舊)

神佛け五つの姿あらはして

救は廣し此の世後の世 (新)

此處迄大西正言氏隨行せられしも、此處より高知に歸らるゝ事とて豫ての約もあり高木大鑑師特に此處に來られ伊豫迄隨行せらるゝ事となる。午後一時より山門前の劇場にて法話す。揮毫等に町有士及警察署長村木傳吉氏等來訪、戒浴後複子は上間の床に置きし儘に門前にある別館にて山主及高木師等と藥石を喫し寢に就く。今夕當山は參詣者にて賑ふ。

○

三十日 朝六時本尊を禮拜し、勤行等を爲して上間に入て見れば、複子の包み解け居るに不審に思ひ調べしに、是は如何に、複子中にありし現金及高岡、宇佐、須崎等にて受けし講演之謝儀、其他包みの儘ありしものも中味の現金丈け全部抜取りあり、大西、高木兩氏も大に驚き早速に警察に通知せしかば、署長村木氏署員二名引連れ驅付

けられ、是れ全く小官等の責任なり。昨日來老師に付添居りながら當地にて斯の如き事件を生ぜしは甚遺憾なりとて複子を仔細に點檢し、且つ謝儀の包み紙を調べ、此の紙の残しありしは至極結構なり。此の包み紙にて指紋を取り置けば犯人は直に逮捕する事が出來ます。既に高知より宿毛迄非常線を張らして置きました。納曰く、盜難の金は殆んど高知縣にて受けし謝禮金にて、納の手許には何等増減も苦痛もなき故安神ありたく、又犯人逮捕になつても、何れ一時の出來心と察しますから寛大の處置を取られ度しと云へば、村木氏大に納の言葉に感激し、夫より俄に警察署員及町有志の間に斡旋して講演、揮毫等の謝儀として參拾金を集めて賜らる。堅く辭せしも一同の淨財故是非快納相成度との事に其の厚意を受く。

土佐路にて受けし布施物其儘に

本來空の財布とぞなる

盗み去るものもあれども贈り來る

人のなさけに旅はやすらか

さて當寺より三十八番足摺山へは陸路二十六里、四國靈場中での最長距離であるから、なるべく交通機關を利用する方便なり。第一は當町より乗合にて五里三十二町佐賀港に出て、夫より土佐沿岸汽船に乗り、窪津に上陸せば徒歩三里にて足摺山に達す。窪津に上陸せず、行過して松尾港迄行き上陸せば徒歩約一里にて足摺山に達す。但し松尾着船は午後十時頃になる故宿に困る事あり、多くは窪津に上陸するなり。第二は當町より自動車にて二十三里、窪津に行けば徒歩三里にて三十八番に達す。併し天候不穩にあらざる限りは船の方身體も樂なり、費用も少ない。本日は至て無風快晴なりしかば船路をとる事にし、午後一時一同見送の中に高木師と同乗、午後三時佐賀港に出て同四時三十分の汽船に乗る。同九時半松尾港に着し山下旅館に宿す。

いにしへは足づりしつゝ詣でしに

今は船路にめぐまるゝかな

○

三十一日 快晴 早天出立、一里餘の山腹を曲折しつゝ、幡多郡伊佐村、第三十八番足

跏山金剛福寺に詣す。本尊千手觀世音菩薩。大師作。

ふだらくやこゝはみさきの舟の棹

とるもすつるも法のきたやま (舊)

足すりのみさきの寺に詣で來て

大悲の御手にすくはるゝかな (新)

當山は土佐南端足摺岬の岬頭にあり。大師巡錫の砌此地に立ち、背後は大悲の山峴々として聳え、前面は弘誓の海漫々として觀世音菩薩利生の靈地なるを感じ嵯峨天皇に奏す。天皇深く聖信を籠らせ給ひ補陀洛東門の勅額を降し、弘仁十三年大師をして伽藍を建立せしめられしなり。此足摺岬は土佐大灣の西岬で海に突出すること五里、東方室戸岬と相距る五十里、東西相對して土佐灣を抱く。岬上は高臺狀の山脈で蜿蜒起伏南北に連亘し、岬端は數十丈の斷崖削るが如く、大平洋の怒濤之に激し頗る壯觀なり。尙リウビンタイ、ピロウ、アコウ等の熱帶性植物よく繁茂し他に見られぬ景觀を呈して居る。此處にも大師の残されしと云ふ七不思議あり。當山住職は不在なりし

も所化二人居り、豫て御參詣を待居りし故一夜にても參籠をと親切に勧められしも松尾に荷も置いてあり、海路は天候のよい間でない難儀故、親切を謝し暫時休息して下山す。一人は村はずれ迄見送らる。但し當山より次の三十九番迄は陸路十七里中々の難所なり。海路を松尾より宿毛片島に着して行けば大に便利なる故、始より其の事に決し居りしなり。路頭風景絶佳是を賞しつゝ、一里を打戻り松尾の宿に船を待つ。松尾は至て海水清澄なりしかば海水浴を爲し休息す。午後は當家の先考の石碑を書し母堂に法名を授く。午後九時乗船す。但し片島迄海上約十六里との事。

### 九月

一日 午前六時宿毛町片島に着く。此處にて中村町の木戸時之助氏に電話す。直に三十九番延光寺に相見に行くとの事、此處より乗合にて宿毛町をよぎり、二里半幡多郡平田村宇中山、第三十九番赤龜山寺山延光寺に詣ず。本尊安産薬師如來。行基作。

南無薬師諸病悉除の願なれば

まゐる我が身をたすけたまへよ (舊)

諸のやまいたすくる薬師尊

慈悲のみ手にはもるゝものなし (新)

當山は神龜四年、聖武天皇の勅願を奉じ、行基菩薩開創せるものにて、其後大師、大同二年より長く此地に錫を止め修法せられし所なり。參拜了て寺の書院にて休息中、數里の中村町より木戸時之助氏寫眞師同伴來訪す。但し木戸氏は納の大坂別院時代に別院に寄宿し、通學し居りし人にて二十年來の知己なれば、足摺山に參詣の往復、是



昭和九年九月一日  
於第三十九番所  
土佐壽山延光寺にて  
右土佐中村町木戸時之助氏  
左 風林 行 應

非中村町に立寄、暫時靜養する様勸め來り居りしも、海路を取りし爲同町に立寄りざりしなり。依て此處に來訪せしなり。紀念撮影を爲し、當寺及木戸氏の爲に數枚の揮毫を爲し、夫より一同片島に出て

一盞を共にし、此處にて訣別し、午後二時の船にて、同四時深浦に着す。此處より四十番迄一里餘馬車の便あり。即ち一臺を賃す。此の御者大に酩酊し居り、且つ馬使の自慢にて鞭一本で馬を跳ねさせたり、躍せたりする。幸に道幅の廣かりし故よかりしも、危なつかしい事夥し。

馬子殿うまこどのの自慢の鞭に此馬車は

躍りつはねつ走るあぶなき

やがて平城村へいじやうに着きければ、馬車賃六十錢の外に、馬に餅でもとて二十錢を餘分に渡せば馬子大に喜び、早速其場にて餅を買ひ納の面前にて之を與ふるに、馬幾度か尾をふり顔をたれて喜ぶ様いと愛らしかりし。又是れ旅中の一興なり。深浦より伊豫の國に入りしなり。夫より二丁上り、南宇和郡御莊町みむら字平城、第四十番平城山薬師院觀自在寺に詣す。本尊薬師如來。大師作。

しんぐわんや自在の春に花咲きて

浮世のがれてすむやけどもの (舊)

平城へいじやうのすめらみことの誓ちかにて

常代とこよの春に瑠璃るりの花咲く

(新)

當山は人皇五十一代平城天皇の勅願所にして、大同二年四月、弘法大師勅を奉じて本尊薬師如來、脇佛阿彌陀如來、十一面觀世音の三體を刻み給ふ。是れ世に名高き一本三體一刀三體の尊像なりと。其後日本四ヶ所の鎮守の一に數へられたるを以て、世に四國の裏關所と稱す。又畏くも平城、嵯峨兩帝親しく行幸ありて御朱印を下し賜ひ、一切經並に大般若經等を納められ、毎歲勅使を下向せしめ、護摩供の秘法を修せしめ給しより此の町を御莊と稱し、勅願山號に因んで平城町と云へり。境内に平城天皇御手植の松、今猶蟠居して常緑の枝葉益々隆昌を表す。當寺住職は不在との事にて門前の旅館に宿を定む。

却説 六月名古屋地藏寺にて四國巡拜を發表以來、伊豫岩松町の安井新惠なる人より、伊豫に巡られし際は是非立寄を請ふとの書面來り居り、札所へも所々へ同様の書面來る。岩松町には臨濟宗妙心寺派の臨江寺と云ふあり。明治三十四年春巡拜の砌、

一日滞在せし因縁の寺なるも、其の頃の住職とは今は代り居り、安井氏が其の寺の住職ならば寺號を記して來る筈なるに、何時の手紙にも寺の名は記してない。然るに名は新惠と稱し、又九拜など書てある處は僧侶の様にもあり、一向見當が付かぬ、全く未知の人である。夫れて次の札所へは十六里程あるが、陸路を行けば自然岩松を通過する事になるし、海路を行けば深浦へ戻り汽船にて海上十二里宇和島に着して、残り二里二十九町にて四十一番に參れる。すると岩松は通らぬ事になる。如何にせんかと考へしが、此れ程迄に親切に申越して居らるゝを立寄らぬも不人情なり。乗合自動車も通ふ事故、明朝バスにて岩松町に向ふ事に決し、高木師をして其旨を電話にて安井氏に報じ置き、戒浴して寢に就く。然るに午後九時頃高木師納を起し、唯今岩松町よりハイヤにて安井氏外二名迎に來り居る。如何なさるゝやとの事に、何れ明朝は赴く事なり。本日は乗物斗りにて、餘り疲れても居らぬ事故、折角遠路を態々迎に來られしなれば、此より赴く事にすべしとて俄に支度し、一同々乗岩松町に向ふ。車中聞及べば、安井氏は宇和島金剛山松尾珠宗師たまきの居士にして、木炭問屋を營み居るとの事、

多年納に私淑し居りし旨なり。

斯く迄も道にいそしむ新惠しんゑどの

やがてみ法の花や開かん

行程八里、午後十二時頃岩松町三好旅館に着す、蓋し臨江寺は舊盆中の混雜にて、行届かぬ事ありてはとの住職始め安井氏等の心遣にて、當旅館を宿所と定めしと云ふ。當家は町内唯一の旅館にて立派なる別館もあり、中々に調ひ居れり。安井氏及當町助役山口文雄氏等集り、滞在中の順序を協定し解定す。時雨後晴。

○  
二日 晴 別館にて揮毫す。臨江寺三關知運みせき和尚、町長山本英藏氏等其他相見者多し。午後八時より臨江寺にて臨濟錄の提唱を爲す。

○  
三日 晴 朝臨江寺にて紀念撮影、同十時學校講堂にて小學五年以上高等小學生全部貳百餘員に講話す。一旦旅館に歸り點心、午後二時再び學校に至り一般の爲に講演す。



昭和九年九月三日午前八時  
岩松町臨江寺にて撮影  
前列右より  
安井新恵氏 鳳林軒 山口文雄助役

夫より安井家に赴き誦經し、旅館に歸れば、宇和島金剛山大隆寺松尾琢宗老師來訪し居られ、山雲海月の情を盡して同宿す。

○  
四日 晴 午前七時松尾師、三關師、高木師、安井氏同乘ハイヤに

て一同見送の裡に岩松町を辭し、同八時前宇和島金剛山に着し、茶菓の饗を受く。山主は暫時滞在を勧められしも、同山は今や伊達侯爵家よりの一寄進にて大修繕中、本日も工匠等澤山人込居り、騒音甚し。依て好意を謝し、豫定の通りに進む事とし、同九時寺を辭し、宇和島驛に向ふ。途中にて高木師は一應土佐に歸るべく袂別す。八月六日岸本寶幢院にて遭遇以來、殆んど隨行補佐せられし事衷心感謝の至りである。

暫くの別れなれども土佐の空



昭和九年九月四日  
於宇和島驛にて撮影  
右より 大槻良三氏 鳳林軒  
臨江和尚 安井新恵氏

ながめて送る心さみしも

驛に着けば吉田町の大槻良三氏待受居り、九時三十七分發に乗り、約二里半務田驛にて下車、約十町徒歩、北宇和郡成妙村大字戸雁、第四十一番稻荷山龍光寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩。大師作。

此神は三國流布の靈教を

守らせ給ふ誓とぞきく

世の中に正法流布を守らんと

誓もかたき稻荷山神

(舊)

(新)

當山は、往昔人皇五十一代平城天皇、大同二年如月初午の日、大師此地に巡錫せられし時奇異なる老翁現れて、大師に告て曰く。我れ此處に住し、佛法を守護し、諸民を利益せんと云ひ終るや、忽然として其姿を失ふ。此に於て大師深く此地の靈感を悟

自ら尊像を彫刻し、稻荷大明神と尊稱し堂宇を建立し、名付て稻荷龍光寺と稱し給ふ。明治維新神佛分離の後、稻荷神社として寺の上方山中に堂宇を建立し祀る。當寺は先住の遺子漸く二十餘歳、此頃高野山大學を卒業して任職せし處なり。其母堂出て來り、是非茶にてもとの事に方丈に通れば、母堂曰く、當寺は至て貧地にて此の子の在學中、惣代の厚き世話になりしも、何等酬ゆるに道なく、老師御來山の節は三四枚揮毫を願ふて、是れを惣代に禮に遣はさんと、早天の雲霓と御待申上げし處、何卒宜敷頼入るとの事に、數枚の揮毫を爲す。點心をとの事なりしも、大槻氏より已に四十二番に依頼しある旨故是を辭し、夫より徒歩二十五丁、同成妙村字則、第四十二番一琛山、毘盧遮那院、佛木寺に詣す。本尊大日如來。大師作。

草も木も佛になれる佛木寺

なほたのもしき鬼畜人夫

(舊)

情なき木さへ佛の佛木寺

心ある身は頼もしきかな

(新)

當時は大師御巡錫の砌、一老翁御案内申し、山中に分け入り、楠の梢に煌々たる光明を放つものあり。曩きに唐土より授け玉ふ處の寶珠なれば、その楠樹をとり、靈像を刻み、寶珠は尊像の肩間に納め、本尊と崇め祀らせ給ふと傳ふ。現任職は大槻氏の知音なるとて、點心の支度を爲し居られ、緩々閑話す。夫より山越にて時雨を侵しつゝ、吉田町大槻氏邸に着す。大槻氏は衲の受業寺(教養せられた寺)丹後須津の江西寺檀徒の出身にて、幼少より兄弟の如くにし來りし親しき間柄なるが、長らく吉田町の學校に教鞭を執り、遂に當町に安住し居る人なり。夫人孝子始め一家學て心置きなき厚遇に全く旅情を慰めらる。

幼なより深き交り其儘に

何時も變らぬ心芳し

夕景圓通寺諦道、光明寺今野弘明、宗圓の三禪士相見に來る。此三士は皆東福寺僧堂にて衲の會下(門下の事)なるが、此邊に居るとは知らざりしに、斯く打揃て來問し來る。御まへ達は此邊の者なりしかと云ふ様な次第、其他安樂寺宗迪和尚、海藏寺月



窓和尚、宗昌寺寶宗和尚、其他町有志等來訪多し。却説、當町を去る數里の西宇和郡双岩村雲松寺、高瀬月津和尚は東福寺派の寺院にして至極の知音なり。先月以來各靈場に書面を呉れ、伊豫八幡濱神山町の篤信家、酒井宗太郎氏より是非立寄りを依頼せられ居る故、其つもりにて來られ度、何日頃四十三番明石寺に參詣あるや、日時定まりし上は明石寺迄迎に行くとの事なりし故、九月四日は吉田町大槻氏方に着し、夫より明石寺へ參る旨を通報致し置きしに、今夕迎に來り、明五日明石寺に詣し、直に八幡濱に御件致度との事、衲も四日は大槻氏方に一夜の宿を借り、五日は直に明石寺に參詣の考へなりしに、大槻氏は昭和三年春、東福寺本堂再建托鉢に巡錫の砌にも講演を願ひし事故、今回も明五日午前十一時小學校にて、午後一時中學校にて講演を願ふ事に町有志及學校よりも依頼を受け居る故明日は御滞在、六日に發錫の事にせられ度との事に、八幡濱へは六日に赴く事に變交す。雲松師曰く、八幡濱の方、酒井氏大坂行きの要務を繰合して待受け居らるゝ事とて、眞に困りますが夫れは電話にて交渉するとして、一方五日には明石寺に參詣せらるゝものと思つて居りし故、南豫一派寺院

五ヶ寺、外妙心寺派寺院等舉て明石寺に集り、歡迎申上る事に相成り居るとの事に、衲も夫れは實に氣の毒故、明日は貴師早天より明石寺に赴き、各寺院方へ衲に代りて宣布挨拶あり度し。且六日は酷暑の時節故、最早一同足勞無之様能々傳へられ度と依頼し置き、同師も當家に泊す。

○



昭和九年八月五日 愛媛縣吉田中學校に於て講演  
同校玄關前にて記念撮影  
前列 海藏寺 檜嶺月窓 大槻良三 風林軒  
安樂寺 奥山宗雄 宗昌寺 狭間寶宗

五日 時雨 早天雲松師は昨夜打合せの通り、明石寺及び八幡濱に向ふ。午前十一時吉田尋常高等小學校にて、四年生以上全部に法話し、午後一時より吉田中學校にて、同校生全部及高等女學生全部、約六百員に法話す。今夕安井新惠氏は岩松に歸る。圓通寺新命(新に住職となりし事)諦道和尚號頌を請ふ。即ち左之一頌を附與す。

聖諦朗廓未兆先

至道無難絶妙玄

六日 大槻夫人孝子、納等多勢の歡待に勤むる傍、昨夜の如き徹夜して衲の爲に白衣



昭和九年九月六日  
於第四十三番明石寺記念撮影 井尻義雄氏寫之  
右より 圓福寺師 海福寺師 常定寺師 雲松寺師 禪興寺師  
鳳林軒 大槻氏 明石寺住職明上座 酒井氏代理同良吾氏

を新調し、且つ衲の帶の、汗と垢とに古びたるを、皮を仕替へて呈せらる。全く涙ぐまじき懇切なり。午前六時雲松和尚、二木生海福寺久瀬祖精和尚、酒井宗太郎氏代理酒井良吾氏等來迎、大槻氏と外に弘明禪人、巡拜終了迄隨伴致度申出是を加へ一同にて發錫、四里餘午前八時東宇和郡田ノ筋村、第四十三番源光山圓平院明石寺に詣す。本尊千手觀世音菩薩、大師作。

さくならく千手のちかい不思議には

大盤石もかろくあげいし (舊)

觀音の妙智の光り明石寺

大千界の闇も照らさん

(新)

當山御本尊は大師の作とも云ひ、作者不詳とも云ふ。外に不動明王雲慶作、多聞天堪慶作を安置す。

元は役の小角五代の祖、壽元尊者の開基なり。後大師嵯峨天皇の勅を奉じ、再興し給ふ處と云ふ。住職明石憲澄師茶菓を設けて接待せらる。此處に東福寺派禪興寺、圓福寺、觀寂寺、常定寺の各師出迎し居



四國八十八ヶ所第四十三番 明石寺山門  
裏より見たる景

り、卯之町光教寺へ是非立寄を請ふとの事にて、約十二町後戻りし、妙心寺派光教寺に立寄る。同寺には昭和三年春、東福寺本堂再建托鉢之砌、一同投宿し講演等を爲せし因縁あり、住職野村玄珩和尚は至て懇切なる人なり。今回も是非兩三日滞在講演等も願ひ度しとの事、併し本日は八幡濱の方へ先約の事故、時日を取定めて更に報道し、再び引返し來るの約を爲し、一盞を受けて辭し、途中双岩村井上醫師方に一休、是又

再來を約し、十二時前神山町酒井宗太郎氏邸に着す。大法寺、萬松寺、寶嚴寺、明光寺の各師も來訪、午後大槻氏は吉田に歸る。さて複子を開きしに、昨夜大槻夫人の替られし、垢付たる白帶の皮入り居りし故、反古籠にても捨つる様と話し居ると主人酒



昭和九年九月七日  
於伊豫國神山町酒井宗太郎氏邸 觀音堂前  
右より 明上座 酒井清一氏夫人 宗夢主人 豐林軒  
酒井靜一氏 酒井年惠夫人 酒井優子嬢

井氏はを聞いて曰く。是は老師が第一番より四十二番迄の靈場巡拜中、着用せられし貴重の品故、物の好惡に拘らず拙者貰受け大切に保存致すべく、何卒帶の端に其由來を記せられよとの事に是を記して残し置けり。酒井氏は天龍寺關管長より宗夢居士と云ふ號を受け居り非常なる篤信家にて、特に大和長谷寺の觀音に歸仰し、邸内には立派な觀音堂あり。毎朝一家舉て禮拜せらるゝ故、夫婦共普門品や

大悲咒、心經消災咒等は、流暢に唱へらるゝ位にて、特に長谷寺管長小林正盛師、天龍管長關精拙師、東福寺栗棘菴の勝平大喜師等に歸依厚く、納は今回初對面なるも、氏は昭和三年春、納が東福寺本堂再建の爲、藤杖草鞋にて大衆を卒ひ、同家門前を通過せし際望見し、爾來私淑し居られ、今回納が突然東福管長の榮位を弊履の如く放擲して、一杖一笠にて四國巡拜を爲せしをいたく感銘して、納を慰勞する爲に迎へしにて何等他意なしとて歡待厚遇せらる。氏は近江帆布會社の重役にして、八幡濱にて自己の機織大工場を有し、大阪伏見町二町目に出張所を設け居り、年齒未だ半百に満たざるも堂々たる大實業家なり。

信心の力も強く海よりも

廣き心の主に逢ふかな

神山の酒井の主の屋敷には

大悲菩薩の示現まします

當家には女中澤山居り、特に隱侍には明上座も居るに拘はらず、夫人年惠姉、貼案料

理の事)の事から納の入浴の事迄、いそしみ勵まるゝには喪心より感嘆せり。

朗かに眺みいそしむ年惠さん

心の奥のゆかしかりける

○ 七日 朝、川之石町龍潭寺小林珠山和尚來訪、是非龍潭寺にても兩三日滞在を請ふとの事、同寺も先年再建托鉢の際勞煩になりし因縁の寺故赴く事に決す。揮毫等を爲し午後四時より酒井家の菩提所、萬松寺にて臨濟録の一節を提唱す。聽衆白五十餘人、依て提唱は簡單にして、四國巡拜の動機、感想を細説す。今夕酒井氏問て曰く、巡拜終了後はどうなさるゝ方針なるや。衲曰く、行雲流水の今の身の上、何の方針も目的も是れなし。氏曰く、然らば御巡拜終了後、寒い間の冬籠は、拙者に一任せられ度し。老師は永い間京都の寒い處で暮されたのですから、此の冬中は至て暖かて、御氣樂に暮さるゝ様拙者が御供養申上るとの事に、其の厚意を受けて一任するの約を爲す。此要談僅々十分を出てず。古人の所謂立談白壁一雙なるもの。

○ 八日 午前中揮毫。午後二時小雨を衝て雲松師、明上座、同乗ハイヤにて川之石に向ふ。酒井氏は大阪に向はる。約二里川之石町龍潭寺に着す。婦人會長菊池敬子姉等相見す。菊池姉は篤信者にて、小林師を補佐して寺觀の修理を爲し、鏡容婦人會を組織して、婦人の修養向上を圖り、一昨年は立派なる會館を一建立して寺に寄附する等、實に奇特なる人なり。龍潭師、菊池姉を讚して、

つね日頃心つくして植付し

○ 御法のなへは何時か榮えん

○ 九日 午前中揮毫。午後一時より鏡容婦人會及處女會の爲に、觀音禮讚會を修し法話を爲す。晚八時より一般の爲に講演す。安井新惠氏又々岩松町より追慕し來る。夜來強風雨後晴。

十日 朝一同菊池姉方へ佛參。同十一時一同見送りの裡に雲松師、明士、安井氏隨伴鶴島丸に乗り、午後一時半二木生、海福寺に着す。安井氏は岩松に歸る。地福寺朝雲清道、三寶寺祖音の兩師及惣代等出迎、午後七時村公會堂にて講演、中井澄氏方にて休息、寺に歸り解定。

○ 十一日 早天、當寺徒弟にて、嘗て納の會下に參ずる事數年、昭和七年二月二十二日前途ある身を惜むべし、二十五歳にて圓寂せし祖英上座の墓を展す。在りし日を追懷し、感無量なり。

若岬の儘に枯るれど今は早や

菩提の岸に實をや結ばん

雲松師は自坊準備の爲歸寺す。同十時學校にて五年生以上二百餘人に法話す。同十一時半より發動小艇を仕立、海福師及惣代四名、外三人等同乗、約二里大島に渡り龍が池を観る。此池は古來活龍栖息すと傳へ、大旱に雨を祈れば必ず靈驗あると云ふ。

周廻僅に三町程の池中に、蓮多く鯉鮒等多く栖めり。此島の兩端に十數丈屹立の大岩あり、其間を舟よぎり風切と云ふ、兩方に奇岩怪石起伏し其上に老松の蟠るあり、實に風光に富めり。沙濱に廻り海上より岩を見る。是を踊り早と稱す。次に又海上二里半高島の西ヶ崎に着く。此處舟幽靈出るとの傳説あり。其南を迂廻し、千人塚の稱ある小高島、又一町餘滿造島を觀て二里餘、午後五時二木生に歸る。本日の舟遊は、海福和尚及檀徒の人々納の旅情を慰むる爲、特に催せるにて、其雲烟模糊の間に十三里突出の伊豫の岬を望みつゝ、其の懷に點在する奇岩怪石の島々を賞觀し、全く一幅の大名畫の中に、悠遊するの感あり。大に海濶の氣を養へり。

○ 島々の奇しきながめをさぐりつゝ、

○ のどけき海のあそび楽しき

十二日 晴 海福師明上座、其他隨伴、舟にて二十五町三瓶町に渡り、地福寺に休息



昭和九年九月十二日  
伊豫國西宇和郡二本生海福寺本堂前  
右 海福寺住職 久瀬祖精師  
左 鳳 林 軒

し、曾遊の三十峯の勝を探る。此處は昭和三年巡錫の砌、觀音薩埵三十三所の開眼供養を親修せし納の香語を、七尺の自然石に刻して建立せし記念碑あり。今其香語を再記す。是にて其勝景を彷彿すべし。

脚下忽開大千界

聖容慈眼滿三靈蹤

奇岩怪石綠苔封

一徑斜通三十峯

齊を受けハイヤにて午後一時、双岩村雲松寺に着す。下灘願正寺、榊原月潭師及惣代栗阪一眞氏と共に上灘下灘寺院を代表し、納を請待の爲に來る。依て十七八日に赴く約を爲す。午後四時より講演す。

十三日 小雨 午前十一時一同打連れ徒歩十八丁、同村若山禪興寺に着す。住職若林祥眞師は舊知なり。午後二時より法話。了而軍醫井上永治氏方に宿す。當家は先年も

立寄りし事とて、夫人たき子氏も歡待大に勤む。時に頭髮長じ居りし爲、近隣の床屋にて剃髪せしに、井上氏は床屋に命じ、頭髮を大切に奉書紙に包み保存せんとす。納曰く、その様な物を何にせらるゝや。氏曰く、他日老師百年の後、遺髪塔を建てんが爲なりと語り居る處へ、彼の床屋來り、此剃刀は最早支用不仕、永代家寶として保存仕度故、早速函を造りますから、函書きを願ふとの事に是を諾す。果して其の夜持參す。即ち函書を爲して與ふ。又是一場の佳話なり。

十四日 晴 午前十一時、海福、雲松、禪興、圓福の四師、明上座隨伴、約三里再び卯之町光教寺に着す。午後四時大槻良三、安井新惠兩氏又々遠方を來訪せらる。今夕藥石は檀徒の松屋旅館の請に赴く。八時頃寺に歸休す。夕景京都東福寺僧堂在錫中の納の會下、宗隆上座慕ひ來る。數日の隨伴を許す。さて當寺は下間(方丈の佛檀の横の間)の方、説備もよく、東司(便所の事)も近く、書院と相對し居り、書院には寺院も數師泊り居り、要事の都合もよいとて、納は一人下間に就寢す。些か般若湯も過し



昭和九年九月十五日 於伊豫宇和町光教寺  
前列右より 惣代 合息 光教師 合息 鳳林軒  
光教寺典方 某師 大梅師  
後列右より 某師 圓福師 弘光上座 海福師  
某師 明石寺師 惣代

居り、晝間の疲労もあり、九時頃よりグツスリ熟  
睡し、午前一時頃小用を便じ、再び電燈を消して  
寝に着きしも、最早や寝足りしにや一向に寝付け  
ず。然るに一時半とも覺ふ頃、突然蚊張の中がバ  
ツト明かるくなりし故、眼を睜つて見ると、こは  
如何に、二十五六歳とも思へる日本鬘を結び、衣  
紋もキチンと調へし美女の半身が、鮮かに現れて  
居る。ハテナ自分は今用便より歸りし後にて夢に  
もあらず、うつゝにもあらず、不思議なる現象なり。或は納の知合の婦人が急死でも  
して、回向を求めに來りしものかと、熟々と見守るも更に覺へある顔にあらず、約二  
分間程考へしも一向見當付かず、依て靜かに、をまへは誰ぢやと問ふて見たが、一言  
も答へなく、唯端然と衲に對して居るのみなり。依て今度は半身を起して、手を以て  
其顔面を拂ふて見たが、確に顔を拂ふて居るのに少しも手答へもなく、姿は依然とし

て消えぬ。是は何か此寺に因縁ある者の靈ならんと考へ、施餓鬼を誦せしに、中程よ  
り次第く影薄くなり、施餓鬼の終る頃には全く消え失せ、元の暗夜に返りたり、  
更に今一卷施餓鬼を誦して、衲も睡りに入る。

まのあたりかくあざやかに現れて  
回向求むる姿いぢらし

○

十五日 早朝寺内の者には極秘に山主玄珩和尚を招き、昨夜ありし次第を語り、心當  
り無之やと尋ねしに、師はハツタト手を拍ち、夫れなれば確に心當りあり、當寺の檀  
徒にて、自動車營業の小泉壽惠滿なる者の妻梅子、至て美貌にて、自分にもそれを自  
慢し好んで日本鬘に結び派出好みの女なりしが、昨年來肺尖に罹り死にとむないく  
と嘆きつゝ、終に本年四月四日、二十六歳にて死亡せり。法名梅室妙薫大姉と授與し  
て葬送せしも、老師の來山を機縁に引導を頼み來りしならんと其位牌を見せらる。衲  
も斯くアリくと亡靈の姿を見しは今回が最初であるし、話を聞けば實狀なる故、寺

内の人への秘密を解き、更ためて山主と共に香華を調へて特に回向を致し遣はせり。却説古來より、幽靈亡魂に就ては、東西兩洋に互り、諸史百家の書物、文献、枚舉にいとまあらず。我が宗では幽靈濟度の公案さへあり、我朝にて最も著しきは藤原廣繼、菅原道眞、佐倉宗吾等あり、芝居などに出て来る、累の如き、凡て髮振り亂し恨めしの相好物凄く、一見慄然たる姿にて恨を述べ、言葉を發し居り、中々活動的になつて居る。然るに、圓山應舉が長崎にて、病女の姿を寫し、大にいたはりし後、其病女が死して、應舉の許に禮に來りし時は、文金島田に盛裝を凝して現れしと云ひ、又數年前の事、尾之道の或る富豪が、十八歳の息女を亡ひしに、其後其娘が夢に現れてお父さん寫眞を取て下さいと云ふて、三晩續て出て來たので、父なる人も不審に思ひ夫人や家人には内密に、一人寫眞屋に赴き、寫眞を探りしに、數日すると、寫眞屋來り、内密にて主人に逢ひ度と云ふ、依て是れに逢へば、寫眞屋曰く、先日は確に貴下御一人で撮影せられし筈なるに、此寫眞を御覽下さいと差出すを見ると、是は如何に其父に並んで、娘が在りし日に桃割れに結び盛裝を凝らせし儘の、あてやかなる姿に

て寫り居り大に驚きしが、其後夫れが評判になり、乞ひ受け度と云ふ者多く、爲に五百枚程焼き増をして分ちしに、一年位すると、父の姿は依然鮮明なるに、娘の姿は段々薄くなり行きしと云ふ話あり。此の寫眞に亡靈の寫りし例も、東西兩洋に澤山ある。斯く諸種の話を綜合して考へると、幽靈の outf にも種々あるならんも、大體盛裝を凝した姿で現れるのが多い様である。且つ大抵は言語を發して居るが、衲の見たのは全然無言なりし。殊に不思議なるは一種の靈用を起すにや、暗夜に拘らず、其の姿の周圍は、一種の明るさを現じ、ハッキリと其の姿の見える事である。衲が斯様の事を云ふと、荒唐無稽の事を作つて云ふ様に思ふ者もあるかは知らぬが、全體人間は地、水、火、風、空の五大原素を借りて、此の形を爲し、其の中に無形無相の大精神が働いて生きて居るのであるが、一息切斷すると、直に死と云ふ状態になつて仕舞ふ。然れば我がくと思ふて居る此の身體其儘が、已に一種の幽靈である。然らば人間が、末期の一念を以て、天地の陰氣に乗じ、朦朧たる姿を現じ、其の一念を通ずるは何の不可思議かあらんやである。不思議がる者、其人は全く物質界、即ち眼に映り、耳に聞え



鼻に匂ひ、口に味ひ、身に觸るゝもの以外に、世界はない様に思ふて、宇宙の間には無形の大精神界、大靈界のある事を信ずる事の出来ぬ、短見偏見者流であると云ふて差支へない。若し夫れ靈界を否定するならば、我が佛教は暫く是を措くも、畏くも我が皇祖天照皇大神を奉始、八百萬の神々は、單に皇室國民の御先祖として、報恩謝徳の爲のみに祭祀するものとするか、昭々靈々たる神徳神威は、千萬世を貫いて盡未來際、いやちこに、國家國民を御擁護下さるものとするか、若し前者のみとすれば、其の尊嚴なる神徳を半減するにあらずや、若し兩方を兼ねるものとせば、亡靈魂の存在も決して否定すべきにあらず。我が佛教にては、一方に靈界を認定して、三界萬靈として祀り、且つ死後の生活、極樂、地獄等を説き示すと同時に、一方には大悟徹底、生死超脱、即ち個々の靈界を超えて直に眞如實相界に入り、三界も二十五有も打破し大宇宙と一體不二の境界、所謂釋尊の草木國土悉皆成佛の妙境に入らしむる、實大乘をも示すのである。心ある人は、此の邊の消息を、能々味ふべきである。

本日は、午後二時より學校講堂に於て農學校、女學校兩生徒三百五十餘員に法話す。

卯之町警察署長田中紺藏氏 縣視學越智正夫氏等も來聽相見す。夕景大槻、安井兩氏は歸去す。

○  
 十六日 晴、多田村大梅寺檀徒惣代にして、老醫なる小倉儔翁來謁、是非大梅寺にて一場の法話を請ふとの事に、十七日大梅寺に立寄る事とす。本日は揮毫等を爲し休息す。

○  
 十七日 晴、午前九時大梅寺より小倉氏等來迎、海福、光教兩師、隆、明二上座、隨伴ハイヤにて約二里、大梅寺に着す。此ハイヤの運轉手は小泉氏にして、幽靈の妙薰大姉の良人なり、納は豫め光教和尚に、本人には話さぬ方宜しからんと注意し置きしに、光教師は乗車せし際、其話をせらる。小泉氏蒼然たりし。本日多田大安樂寺菊池謙堂師、圓福寺鹿翁師、多田村長門多弦治郎氏等來謁、菊池師二絶を賦して呈し來る。

大師靈德乾坤耀

禪密由來同一家

共 二

八十八區靈跡聯  
無人了解南詢意

煙霞迎錫笑顏鮮  
正是鳳林無上禪

石山相見敢綴蕪言成七言二首謹而呈之謙堂

午後一時、同村學校にて、尋常五年以上、高等生共四百餘人に法話す。宿所は檀徒古谷わか氏方に設けあり。此の家も先年休息せし家なり。親族古谷賢洋氏接待役たり。此處より四十四番に行くには、約二十里。大洲、十夜が橋、内子、梅津、中田濱、上田濱、下板場、搦田峠を経て久萬町に出づるなるも、衲は下灘上灘へ廻る事として、如何なる巡路になるや不明なるも、明日は兎に角、下灘に向ふ事とす。

十八日 時雨。午前九時海福師、小倉翁、大梅寺令徒、隆、明二上座等、同乗ハイヤにて凡そ七里。大洲驛着。願正寺榊原月潭、正法寺本多秀道、道玄寺富永憲道の三師



昭和九年九月十八日 於伊豫國伊豫郡下灘栗阪一眞氏邸  
(前列右より) 栗阪一眞氏 鳳林軒 海福寺久瀨祖精師  
道玄寺富永穆洲師

來迎し居り、大梅徒及小倉翁に別れ、汽車にて長濱に出で、又ハイヤにて一里半。下灘村長、栗阪一眞氏宅に着す。一派寺院七師、及惣代三氏等に相見し、記念撮影し、齋後山上八町の願正寺に着す。住職月潭氏は衲の會下の事として、眞に寛ぎて休息す。字串の、田中うた子姉來訪、同姉は京都在住中、東福寺慧日婦人會の幹事たりし人として、至て懇意なり。久瀨を敘す。

十九日 午前九時、一同隨伴、小舟にて凡そ一里、下灘豊田に着し、潤木彦市氏方にて各寺院と共に齋を受け、午後二時學校にて一般に講演し、終て願正寺に歸休す。海福師は二本生に歸る。今夕田中女史栗阪氏等と藥石を共にす。

二十日 午前中揮毫。午後栗阪氏方に移り、休息午後十一時頃より、暴風雨となる。

二十一日 夜來の暴風益々募り、三四時頃最も劇し。當家は波打際より十間もなき海濱とて狂瀾怒濤は土塀の下に打寄せ轟々の音は天地も崩れん許りにて、當に此の家をも吞却し去るの勢なり。然るに栗阪氏は不在なり、令息等の話には、風向きが北に向ひ居る故、此家は安全にて、危険は無之と云ふに、安神して寝み居たり。何ぞ圖ん、今朝京阪神地方は千古未曾有の大惨害なりしとは。

荒れ狂ふ波風いとも凄じく

夢を破りていねもやられず

午前八時頃より、追々晴れ互り、忘れた様に静かになる。本日は彼岸の入りなり。諺にも暑い寒いも彼岸迄と云ふ。此頃は朝夕大に凌ぎよくなれり。此れよりは日々暮しよくなり、旅行も樂に全く旅行シーズンに入るなり。

二十二日 晴 午前七時半願正師、栗阪氏、其他隨伴。徒歩一里。再び豊田の學校にて、尋三以上四百餘の生徒に講話す。夫より舟にて約一里正法寺に着し點心當寺住職本多師も納の會下なり。閑栖和尚(先住にて隱居し居る者の稱)等こもく歡待せらる。午後四時上灘正光寺藤本玉洲師、武田克巳氏等來迎。武田家に着し、藥石後同家の祖父仁三郎翁の別邸に泊す。翁は號を竹齋と云ひ、本年八十七歳。耳些か遠きも、矍鑠壯者を凌ぐ。書畫共に長じ快談縱横す。

二十三日 揮毫等にて休息。午後七時より、町内淨土宗本覺寺にて、同寺住職千葉專城師、正光師、町長井上熊太郎、谷口恒太郎、矢野孟、井上豊、奥島傳三郎、鷹尾寛一の各氏、外數氏相集り、坐談會兼歡迎會あり。歡を盡して武田別邸に歸り泊す。但し當町には本派大通寺あり、同寺にて納の宿所の準備し居りしに、兩三日前より、住職奥村玉堂師、急性の喘息にて注射を要する位となり、不得止俄に武田家に變更せし

との事なりし。晴。

二十四日 午前九時十五分の汽車にて、正光師、隆、明二上座隨伴。一同見送の裡に上灘驛發、同十時松山着。此處にて隆上座を歸京せしめ、省線バスにて久萬に向ふ。途中久萬營林署長長尾鷹二氏乗合す、正光師と知己の間柄なり。同十二時久萬町谷龜家に着し、長尾氏と同席し一同點心。午後河瀬定徳寺小糸宗謙師來謁、宿所を面河屋に定め居るとの事、依て四十四番へ參詣終て其方に移る事とす。小糸師は納の會下なり。久萬警察署長氏本卓吉氏も來訪。一同打連れ、約八町徒歩、上浮穴郡久萬町第四十四番菅生山大寶寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、往古白鳳、年間百濟より渡來の聖僧、捧持し來りし尊像と傳ふ。

今の世は大悲のめぐみ菅生山

つひには彌陀のちかひをぞまつ (新)

大寶は外にはあらし皆人の

慈悲の心にやどるとぞ知れ

(新)

當山は、文武帝御惱平癒の祈願靈驗ありてより、大寶年中の創立なれば、寺號を大寶寺と稱し、又當寺より石槌山一帯を、菅生領と云ふより菅生山と號す。住職は不在なりしも、茶菓の接待を受け、内陣及寶物をも拜し、面河屋に歸り休息す。澁草藥師寺藤原楊州和尚も來會。兩署長始め一同にて面河溪見物を勧めらる。依て一同の好意に一任す。

お久萬大師、當町は山間の高原にして、往昔は至て僻村なりしが、おくまと云ふ老婆あり、常に機織をして細き煙を立てゝゐた。大師御巡錫の時、老婆の家の前を通られ、老婆に布の切れを乞はれしに、老婆は心よく今織つゝある機の中のよい處を惜げもなく切て大師に奉つた。大師は老婆の心に感ぜられ、何か願があればかなへてやると仰せられると、老婆は此の邊に町を作つて下さいと願つたので、それは安い事、おまへの一生の内になへてやると云はれ、後大師の力により今の町が出来たと傳へ、其の町を老婆の名を取て、久萬町と名付けられた。其のお久萬婆さんの碑は町の入口

に建て、ある。尙後世町の人々より、お久萬大師として敬慕され、其附近にお久萬寺が建立され、信仰者多く股賑を極めて居る。

一四〇

二十五日 快晴 早天川瀬村善通寺、國政馨嶽師、同寺惣代日野哲氏來謁。同師等、及正光、定徳兩氏、久萬營林署森山一二氏等、同乘、七里二十町新原にて下車。夫より羊腸たる山路、里を徒歩、途中藥師寺和尚、及營林署出張所山内正勝氏、面河駐在の河合憲吉巡查等加はり一行十一人、路上水光山色の美を賞しつゝ、漸く關門に達す。そもく面河溪は、石槌山の山懷仁淀川の源流の面河川約二里と、支流鐵砲、石川の溪の外、近頃更に割石川、長瀬川久萬川の支流をも加へて、大面河溪と呼んで、雄大豪壯の溪谷美として、天下に紹介せられつゝあり。今此處に管營峯氏の、面河の旅の一節を抜萃して、其概要を彷彿せしむ。

只見る兩岸の巍岸累々層を爲し聳立恰も夏雲の如く、相對向して、自ら關門を爲す。岩頭著しく突出呼應し、正に轉墜せんとして未だ落ちず、岩面蒼拗千古の皺波を存し、石罅より老木綠樹、横生縱生、或は倒生して、天に朝するもの、水に臥するもの、千形萬狀蒼鬱として晝尙ほ暗きの感あらしむ。巖壁高さ數丈、幅亦數丈、其間に紺碧深潭を湛ふ之を鴨ヶ淵と云ふ。鮭魚躍り岩燕飛ぶ、鴨ヶ淵の上縁に清流を兩分して、一大巨巖横はる。形獅子頭の如きを以て之を獅子巖と云ふ。其左右又奇岩蹲踞するもの虎の如く龍の如し。董巨の刻意を借ると雖も胡んぞ斯の如きを得べけんやの感がある。之ぞ實に天造の靈域にして、人界の仙境と云ふべし。さても關門の岬岸飽迄も峻に、水流飽迄深ければ、此に行路窮まつて進むべからず。往時は巖壁に梯子を架し、巖頭を越へて、僅に關門の巖角相迫る所に架する、所謂空船橋に出でたるものなるが、數年前より巖壁に横に棧道を作り、深潭惟巖を俯瞰しつゝ、空船橋を渡るに適す云々。形容し得て妙なり。

關門の空船橋を渡り、川の右岸密林の中を進むに、三箇の巨巖相抱擁して、中に碧潭油を湛へたるが如きを望む。之を潮ヶ淵とも八卷石とも稱す。此處より紅葉河原、五色河原と、進むに従て、溪流益々奇觀を呈し、脚の進むを覺えず。全く古人の只

見、溪廻路轉、不知在身桃源の感あり。

夫より三丁天を摩する大斷崖高さ三百五十尺、幅員六百六十尺、その中央部は丸く突出して、恰もビール樽の如く、又龜の腹に似て、頗る奇觀を呈する大絶壁、是が龜腹で、雄勁、雄大、莊嚴、壯絶、面河の本領を發揮す。此の他枚舉に暇あらず。此の龜腹に對面せし盆地に溪間唯一軒限りの、溪泉亭と名くる、料理兼旅館あり。設備中々に完全なり。澁草藥師寺惣代、久保田重見氏、經營する處にして、重見丈太郎氏常在支配す。一同此處に宿り觀賞を恣にす。

來て見れば聞きしにまさる面河溪

是はくんと斗りなりけり

但し今十日程、遅く来りなば全山紅葉して、一層の美觀なりと云ふ。深山幽谷の事とて、間々已に半ば紅葉せしものもあり。實に天下の絶勝なり。一行十一人の外に村内有志も加り、歡迎會を開けり。揮毫もなし休息。

二十六日 夜來小雨後晴 午前九時一同發足、凡そ半里、字若山にて有志の者、山駕を用意して待居りし爲、不得止之に乗る。徒歩よりも窮屈なるも、其親切には感謝の外なし。又是旅中の一興なり。約一里半栃原に出て自動車に乗替、約二里澁草大西旅館に着す。但し藥師寺は約半丁の山上にあり。未完成の寺にて、設備調はず、住職及惣代等此宿を借切りて案下所と爲し居りしなり。午後は揮毫、晚藥師寺にて法話す。此の寺は寺號公稱未だしなるも、納の在職中に手續を了じ、最近公認ある筈なり。面河村は四里四方位の境域あり。山又山の溪谷に點在する人家、凡そ五百戸位の村に、寺院は一ヶ寺も無かりしを數年來藤原師、千辛萬苦、漸く藥師寺を設立せしにて、檀用等にも草鞋にて、山又山を三里四里を往復すると云ふ、眞に護法扶宗の願力堅固なるに非ざれば到底堪へ得ざる處なり。惣代にして村長たる高岡宮吉氏、惣代久保田重見、助役菅誠明の諸氏最も盡力補佐しつゝあり。

二十七日 晴 午前九時發錫、凡そ一里、村長高岡氏方にて一盞を受け、夫より來栖

峠の峻坂を越え、約二里、上浮穴郡仕七川村大字七鳥、第四十五番、海岸山、岩屋寺に詣す。本尊不動明王、大師作。

大聖のいのる力の岩屋寺

石の中にも極樂ぞある

金剛の不動の姿岩屋寺

心強くも祈れ人々

(新)

當山は背後に金剛界峯と名くる奇岩聳立の下にあり、全く奇觀なり。又斯の如き深山に、海岸山と云ふ山號を大師が貽されしは、御修行中、雲霧の出没をかたどり

山高き谷の朝霧海に似て

松吹く風を波にたとへむ

と詠じ給ひ、此山號を付せられしなり。住職親切に諸堂の案内をせられ、茶菓を亨し山下迄見送らる。夫より約三十丁、古岩屋寺に詣す。當寺は岩屋寺の元の境地なるも今より六百餘年前、元應二年地變ありて、山嶽崩れし爲、轉地せりと傳ふ。岩屋寺以

上に怪岩奇峰多く、小堂宇を存し、今は東福寺派善通寺の國政師管理し居る事として、同師を随伴し居り。暫時休息して、一里餘の山を越え、川瀬村字畑之川に出づれば、久萬より迎ひのハイヤ來り居り。午後五時頃久萬面河屋に歸る。晩は警察署長氏本氏營林省署長長尾氏等發起にて、谷龜屋に於て町有志三十餘員、歡迎坐談會あり。久萬署の山崎庄五郎氏幹旋最も勤む。郷社三島神社宮司田村壽榮氏等も來會す。快談縱橫歡を盡して、午後十時面河屋に歸り泊す。

○

二十八日 好晴 八時半のバスにて正光、定徳兩和尚、明上座と一同の見送りを受けて久萬を辭す。約二里、三坂峠の手違と名くる處にて納等一行は下車す。正光師は此處にて訣別、バスの儘にて歸る。納等は山腹を辿り下る事約一里半、温泉郡坂本村大字淨瑠璃、第四十六番、醫王山淨瑠璃寺に詣す。本尊藥師如來、行基作。

極樂の淨瑠璃世界たくらば

うくる苦樂は報ひならまし

(舊)

此世をば淨瑠璃界となしぬれば

此身此儘佛なりけり

(新)

一四六

當山住職は長らく洋行不在にて、留護の者至て慳食なるとて、巡拜者は四國の關所など云ふて居る。併し納等には何の痛痒もなし。次に五丁にて同村、第四十七番、熊野山、八阪寺に詣す。本尊阿彌陀如來、惠心僧都作。

花を見て歌よむ人は八阪寺

さん佛乗のゑんとこそきけ

(舊)

諸人よ八苦の八阪越えぬれば

身は極樂の中にあるなり

(新)

當山は、役の小角の開基で、後に大師再興せられしなり、住職在山暫時休憩し、又五丁にて

番外衛門三郎の舊跡、文珠院大法山徳盛寺に詣す。本尊地藏菩薩、大師作、淳和天皇の天長元年、大師四國巡錫の際此地に着かれし時、一童子大師の前に現はれて、尊師

靈場を開くと雖も、衆人未だ佛法に入り難く、願くば邪見の輩を善導し、靈所巡拜なさしめば、末世の鑑たるべしと告げ、何處ともなく消え失せり。大師感得し給ひ、當國城主河野氏の一族に、衛門三郎とて、富豪なれども邪見の者ありと聞かれ、彼を善導すべく、門に立ちて食を乞ひ給ふ事數日、然るに毎日素氣なく追ひ拂ひ、遂には三郎自ら竹箒を持って打たんとす。大師鐵鉢にて受けられしに、鐵鉢不思議にも八つに碎けて飛び其破片光明赫々として、山の尾々に降り落ちたり。これを鉢降り山と云ひ、落ちたる處に八つの窪みを生ず。之を八窪と云ふ。當寺より西南五六丁の丘陵にあり大師そのまゝ當寺に入り、八日間に地藏尊、並に御自像を作られし。即ち當寺の本尊之れなり。

我れ人を救はんための先達に

みちびきたまふ衛門三郎

衛門三郎に八人の愛子ありしに、其翌日より病もなきに、上の子より八日間に、毎日一人宛頓死せり。爰に於て大師は右八人の幼兒の菩提の爲、且つ末世の人への教へ

一四七



にと八塚を造り法苑一字一石を一夜に書寫し、墓に納め、尙前記の本尊地藏菩薩を彫み冥福を祈らせ給へり。塚は寺より二丁の處にあり。當寺は今曹洞宗に屬し居り。住職は、定徳師と懇意なるやにて、點心等種々歡待を受く。又五丁。

札始大師に詣す。本尊七晝夜兩又鎌御自作大師なり。大師此處を假の住處と定め、附近各地を接化せらるゝ時、衛門三郎の邪見を誡む。三郎八人の子頓死し、悲みの夜夢に大師現はれ八人の子が頓死せしは我が鐵鉢を割りし報なり、汝一心に四國を順逆となく二十一返廻るべし、其時我對面して汝が罪を許すべしと告げらる。三郎初めて菩提心を發し、家財を整理し、妻とも離れ、遍路姿となり、第一着に參りしが此大師堂なり。大師は三郎の發心して來る事を豫知し、香木の流るゝを拾ひ兩又鎌にて自像を刻み置いて去り給ふ。三郎遂に逢ふを得ず。松樹の下に一夜を明かし、名札を取り出し、年月日を記して、他日大師の照覽あらん事を願ひつゝ、御跡を尋ねて發足す。故に四國遍路開祖衛門三郎札始め大師堂と云ふ。四國番外第一の札所なり。茶菓を受け暫時休息す。

ありがたや伊豫の小村の札始

大師の光りあらたなりけり

夫より又三十町、同郡久米村字高井、第四十八番、清瀧山安養院西林寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、大師作。

彌陀佛の世界をたづね行たくば

西の林の寺にまゐれよ

(舊)

彌陀佛の極樂世界尋ねれば

西の林の寺にこそあれ

(新)

當山は行基菩薩の開基で、現今の處より十四町西南の地にありしを、大師御移築になりしと云ふ。次二十九町久米村大字鷹ノ子、第四十九番、西林山三藏院淨土寺に詣す。本尊釋迦如來、行基作。

十惡の我が身を棄てず其儘に

淨土の寺にまゐりこそすれ

(舊)

十惡の此身を捨てず此世にて

一五〇

淨土の寺にまゐるうれしき

(新)

當山は孝謙天皇の勅願にて、天平年中、行基菩薩の開基する處、大師留錫の靈地なり。次に十五町同郡桑原村大字畑寺、第五十番、東山瑠璃光院繁多寺に詣す。本尊藥師如來、行基作。

よろづこそはんたなりとも怠らす

衆利なかれとのぞみ祈れよ

(舊)

世の中は繁多なりとも怠らす

法の道にと觀み進めよ

(新)

當寺も孝謙天皇の勅願にて行基の開基なり。其後伊豫入道賴義朝臣再興し、重ねて桑原の先祖平氏弘兼の再興にかゝり、光明院とも號したる道場なり。大師も御留錫あり。又一遍上人は當寺にて修學せられしと云ふ。猶當山に奉安せる、歡喜天は、徳川五代綱吉公の歸依したる所と傳ふ。古は京都東山泉涌寺の隱居所なり、故に山號を東

山と稱す。山主丹生屋隆道師は、大正十五年十月、日本佛教徒支那佛教視察の際、一行二十二人の一人にして、一ヶ月餘、起居を同ふせし舊知にして、爾來京都へ來らるゝ毎に必ず來訪ありし位にて、土佐の札所其他へも、參詣の日時を尋ね居られし事とて、早速洗足し歡待を受く。同師は當山に住せらるゝ事多年、諸堂宇を修理し、庫裡を改築し寺觀大に備り居り、又境内展望にも富み一層引立て見えたり。白石芳留師來訪、相見暫時にして歸去、定徳師は松山市阪田家へ先驅に赴く。山主と山雲海月の情を盡して解定す。本日は札所五ヶ所、番外二ヶ所、歩行も五里餘、中々に疲れたり。

二十九日 晴天 朝早く定徳師來迎、繁多寺を辭し約二十町、温泉郡道後湯之町

第五十一番、熊野山石手寺に詣す。本尊藥師如來、行基菩薩作

西方をよそとは見まじ安養の

(舊)

寺にまゐりてうくる十樂

世の中の因果の理法明かに

(新)

當山は聖武天皇の勅を奉じ、神龜五年、行基菩薩開創す。後天平元年、越智玉澄の再建にかゝる。往昔は虚空藏院安養寺と稱し、法相宗なりしが、後寛永三年石手寺と改め、眞言宗に轉ぜり。石手寺の起りは、衛門三郎(四十七番八坂寺參照)大師の跡を尋ね、て二十一回四國を巡り、十二番焼山寺(阿波)に於て、臨終の砌、不思議にも大師出現、三郎は自分の再生を願望し、大師より一つの小石を握らせられ、遂に息絶えた。(十二番杖杉菴參照)其後天長九年八月、當國の領主河野息利公は、玉の様な一子を儲けたので、息方と名け、其成長を樂んが、どう云ふものか何時になつても左の掌を開けぬ。そこで日頃尊信する安養寺の住職に加持を頼み、幾日か祈禱の後、掌が開いたら、不思議や其中から一寸八分程の小石が現れ、石には衛門三郎と書き付てあつた。即ち息方は衛門三郎の生れかはりであつた。是を玉の石と號し、安養院に納め、堂を建て供養せられたる因縁によりて、寺號を石手寺と改めたりと云ふ。但し此改名は事件當時にあらざ、遙に後の寛永三年である。當山は現今住職を缺くも遺弟七八人

もあり、其中年長の人山内隈なく案内し、歡待し、其の玉の石をも開て觀せらる。色紙短冊等數葉を揮毫し寺を辭し、約二十五町にて松山市に出て、豫て定徳師より案内を受け居りし、同市御寶町、阪田又次郎氏方に着す。同氏は今回初相見なるも、定徳師の信徒の一員にて、至極氣樂に夫人菊子姉と暮居られ、豫てより夫妻にて衲の事を心配し居り、當市にて緩々滞在、道後温泉にも入湯靜養せしめんとて、定徳師を通して疾くより申越し居られしなり。來て見れば別に宏壯なる構にはあらざるも、至て落着きよき家にて、夫妻と女中一人と、定徳師の隨身も手傳ひ居り、眞に物靜に且又道後温泉迄、僅に十五町位、然も電車の便もあり申分なき家なり。午後は早速道後入湯に案内せらる。當温泉は湯の量は豊富と云ふ程にはなきも、我朝温泉中では最古のもの、一つで、其起りは神代に溯る。國土經營の爲、諸國を遍歴してゐた、大巳貴命と少彦名命の二神は、はからずも伊豫の國とある海近い山裾で出會はれた。二神は其奇遇を喜んで、經來つた國々の珍らしい話などを交した後、如何に自分達が人民を從へて來たかと云ふ事について語り合つた。大巳貴命はどちらかと云ふと武を以て從へ

やうとし、少彦名命は徳を以て懐け様としてゐたのであつた。大己貴命は少彦名命の話を聞いて、今迄何年か自分のやつた事が過つてゐた事に氣がついた。慚愧の思ひがこみ上げて來ると同時に、命はウーンと言つて其場に倒れてしまはれた。少彦名命は驚いて水を捜すと傍の岩根から、湯氣を立て、清らかな泉が湧て居たので、それを汲んで大己貴命の體に灌ぐと漸くすると、命はバツチリトと眼を開て、四邊を見廻し、「眞暫寢哉」と云ふて元氣よく地を踏しめて起ち上られたと。神代からの歴史を持ち、尙其後、孝靈、景行、仲哀、舒明、齊明、天智、天武の諸帝や、神功皇后、聖德太子等の行幸啓があつた。斯の如く古くから聞えた靈泉である。

松山の阪田の翁な姫なとも

厚きこゝろに旅をなぐさむ

道後なるいで湯にゆあみ旅の塵

洗ひ落して心すがしも

夕景、本縣警察部長連修氏の代理として、高等課長大和田正氏來訪、明日は日曜故、

何れへか御案内致すべしとの事に、五十二番と三番とへ參詣致度旨申置けり。

○

三十日 小雨なるも午前八時大和田氏、縣の自動車にて迎ひに來られ定徳師、明上座隨伴、約二里温泉郡和氣村第五十二番、瀧雲山護持院、太山寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、閻浮壇金の秘佛にして作者不詳なり。

太山に登れば汗の出でけれど

(舊)

後の世思へば何の苦もなし

眞心をさゝげて參る太山寺

(新)

險しき路も何の苦もなし

當山は三津濱より二十町、高濱より十町餘にして寺に達す。人皇三十一代、用明天皇二年、豊後大野郡眞名原村の眞野長者、津の國浪波に渡船の砌り、高濱の沖にて俄に暴風雨となり、船は覆らんとせし爲、長者は一心に觀世音菩薩を祈りつゝありしに、やがて瀧雲山の頂上より五彩の光明輝き、不思議にも風波をさまり危難を免れた。長

者は其光明を便りに、船を高濱に着け、直に山に登りたるに、小さき草堂に十一面觀世音ましませしかば、尊像を拜して靈驗報恩の爲御堂建立の大願を發し、速に本國に歸り、數多の工匠を集め工事を起し、間もなく木取が出来たので、舟に積み白杵の港を發つと一日にして高濱に着き、其の夜の内に組立にかゝり、夜明け迄に一大御堂は巍然として建ち上つた。是故に今に一夜建立の堂と稱へ、且つ貫と楔を用ひてないのが特長で、建築學上貴重な建物で、特別保護建造物に編入されて居る。後行基菩薩聖武天皇の勅を奉じ、十一面觀世音菩薩及四天王の像を彫み、又天皇御自身も、金光明最勝王經、及法華經を書寫され、此山の嶺に埋め給ふて（今此嶺を經が森と呼ぶ）鎮護國家の道場と定め、現在の寺號を賜ふ。當山は本堂と納經所と二町餘を隔て居る故、自動車を止めて定徳師を納經記牒に赴かしめしに、住職は是非立寄られ度との事に、車を出て請せらるゝ儘に一同書院に休息す。然るに山主は嘗て智山大學在職中、東福寺門前寶樹寺に寄宿し居りし事あり、東福寺山内の事情にも精通し、乍餘所納をも見知り居るとの事、且つ禪宗僧堂生活の讚仰家にて、徒弟は凡て僧堂に入れて居ると

語らる、次に十八町同郡和氣村第五十三番、須賀山正智院圓明寺に詣す。本尊阿彌陀如來、行基の作

來迎の彌陀の光の圓明寺

(舊)

照りさう影は夜なくの月

ありがたや彌陀の光の圓明寺

(新)

劍の山も消えうするなり

當山は天平正暦元年、聖武天皇の勅題にて、行基菩薩開創し給ふ處、又文永年間、凝然大德此山に於て、八宗綱要を著述すと云ふ。夫より四里、北條町海岸に着すれば同町駐在巡查部長加藤秀男氏外一名出迎し、約四町の渡を超へ、鹿島神宮に奉養す。此神宮は周圍二十町の島にあり、古へ松山城主久松氏、軍神鹿島神社を崇拜し、神鹿として鹿を澤山奉納せし爲、今に於て栖息し居れり。數町の海中に双岩屹立し、恰も伊勢の二見に彷彿たり、遠くには内海の島々浮出て、船舶の往來は織るが如く、實に風光絶佳なり。

来て見れば二見にまがふ島景色

げにすぐれたる宮居なりけり

島の半ばを廻りて風光を賞し、神宮に隣れる料亭にて鄭重なる饗應を受け、神宮の爲に額、軸各一枚を残し置けり。蓋し納の法門人なる山本烏藤居士と、連修氏と懇意の間なる爲、特に厚遇せられしなり。午後三時松山に歸り、阪田家に休す。山本烏藤氏へ本日の事を記し禮狀を發す。

## 十月

一日 晴 一同打連れ、松山城に登り觀望を恣にす。此の城は勝山頂上にあり、登り八丁、殆んど城門に近き谷合の一部に、先月二十一日の大暴風の爲大木數十本打重りて將棋倒しに打倒れ居るを見る。全く凄愴の氣に滿てり。當時の如何に劇しかりしを語るに足る。本日大通寺玉堂師來訪、曰く先日上灘にては病中失禮任りし故、道後の

信徒川吉旅館にて一泊を願ひ、御歡待申上度との事、依て是を諾し三日に赴く事とす。同時に願正寺榊原師も來訪、栗阪一眞氏の姉、栗阪八重子姉よりも一泊の請ありとの事、是又明二日に赴く事とす。

○  
二日 晴 午前十時市内正宗寺に白隱禪師の舊跡を偲び、又子規の墓を展し、夫より栗阪八重子姉方に赴き休息す。此の家の正面約五町を隔てし小山の麓の、山越と申すに龍穩寺あり。其境内に十六日櫻と云ふ名木あり。昔此山越に吉平と云ふ老人あり、此櫻を愛してゐた、大患にて將に臨終にも及ばんとせし際、其の息子は一目父に見せたいと正月十五日と云ふ寒夜に、徹宵樹下に立つて一心に祈願を籠めし處、一夜の内に花咲き同時に吉平の病氣も平癒せり。其後毎年一月十六日には開花するので孝行櫻とも、十六日櫻とも呼ばれて、今日に至るも其徳を讃嘆せられて居る。孝行の徳天地を感動せしめし好例なり。

三日 小雨 大通師の請なる道後川吉旅館に赴く。主人川崎朝二郎と云ふ。當家は道後にも一流の旅館なり。母堂七十餘歳至て信仰家なり。一同にて大に歡待せらる。河野村善應寺高繩泰應師も來訪す。揮毫等を爲す。

四日 朝一同にて、一遍上人の舊跡、松ヶ枝町寶嚴寺に詣す。當寺は天智天皇四年の建立で、時宗の開祖一遍上人はこの寺に生る。一遍上人とは、伊豫の守護職、贈正五位河野通信の子、別府七郎左衛門尉通廣の二男、延應元年生れ、叡山に登り慈眼僧正に十二年師事し、天台の奥義を會得し、後大宰府西山派聖達に就き淨土教の蘊奥を極む。尙建治元年、紀州熊野本宮に百日大誓願し神勅を受く。名を一遍と改め、諸國を遊行し、貴賤道俗を勸化し、正應二年兵庫に於て遷化す。行年五十一。上人自作の像當寺に嚴存し國寶となり居れり。住職茶菓を亨し種々縁起等を語り、諸寶物等を拜觀せしめらる。夫より道後公園を一覽し、齊後阪田家に歸る。明五日出立せんと思ひしに、阪田氏曰く、六日七日は當市の大神事にて昔より喧嘩祭と稱し、神輿と神輿とを

衝突せしめ、輿丁等互に喧嘩し、中々に壯快なる祭にて態々遠方より特に拜觀に來る

位なり。今一兩日の事故是非滞在せられよとの懇切に七日中迄滞在の事と決す。

六日 善應師再訪。大和田正氏も來訪。時雨。

七日 時雨、神輿數臺を拜す。本年は警察の警戒嚴重なりし爲、例年程には騒がざりしとの事なるも中々に潑刺たる祭なり。

八日 快晴 大通、定徳兩師 阪田氏等見送の中

に明上座一人を隨へ、午前七時十四分發の汽車にて松山を辭す。同九時半波止濱驛に下車、徒歩一里半、山越にて越智郡乃萬村大字阿方、第五十四番、近見山不動院延命



昭和九年十月五日 於松山市御寶町坂田又次郎氏方  
前列右より 坂田氏夫人の甥 高木健氏 坂田又次郎氏  
風林軒行應 坂田夫人菊子氏 大通寺の徒弟  
後列 小糸宗謙師 奥村玉堂師 今野弘明侍者

寺に詣す。本尊不動明王、行基作

くもりなき鏡の縁とながむれば

(舊)

のこさず影をうつすものかな  
生れ死ぬきづなを断ちて延命寺

(新)

不動の心我がものにして

當山も行基菩薩の開創なるが、後に嵯峨天皇の勅願により大師復興し給ひし處。當寺は本堂の扉開き居り、掃除も行届き随意に本堂に昇りて禮拜の出来る様にしてあり大に便利と爽快を感じり。又一里、今治市第五十五番、別宮山金剛院南光坊に詣す。本尊大通智勝佛、行基作

このところ三島の夢のさめぬれば

(舊)

別宮とてもおなじ垂跡

十方の世界に大通智勝佛

(新)

別宮なぞと誰が名づくらん

當山は大山祇明神の本地佛にして元、大寶三年文武天皇の御宇、國司越智玉澄公が明神を大三島より勸請し、別宮地の御前と申す、明神の別當は二十四坊ありしが、今は其一坊のみ残れるなり。暫時休息し又々徒歩一里、越智郡日高村小泉第五十六番、金輪山勅王院泰山寺に詣す。本尊地藏菩薩、大師作

皆人のまゐりてやがて泰山寺

(舊)

來世の引導たのみ置きつゝ

六道の能化の誓ひ泰山寺

(新)

心ちらさすいのれ人々

當山は大師の開創にして、往古は七堂伽藍完備し、塔中十坊を有せしも嘉永元年兵火に罹り、今は僅に此の堂宇を残すのみとなる。石段の右に大師手植の松あり。不忘松と云ふ。住職は漸く二十三歳の青年にて大本祐章と云ふ。其祖父大本有泰師七十八歳なるあり。先年鳳精州師等と同道、東福寺に參られし事ありしとて非常に懐かしまれ、是非一泊をとの事なりしも、隨身等も不在の様子なりし故茶菓を受け好意を謝し



て次に進む。途中蒼社川あり。九月二十一日の大風雨にて橋梁流失し居り、然ればとて渡しを置く程の大河でもなく、十町程迂廻すれば橋あるとの事なるも夫も大層なり不得止、一尺五寸位の深さを歩渉す。中々に困難なりし、約二十町越智郡鴨部村字八幡、第五十七番、府頭山榮福寺に詣す。本尊阿彌陀如來、海中より出現せる靈佛と傳ふ。

此世には弓矢を守る八幡なり

(舊)

來世は人を救ふ彌陀佛

弓矢守る神とあらはる八幡も

(新)

本地は慈悲の彌陀とこそ知れ

當寺は二町上の山にある。八幡明神の本地で維新迄は神社と並て居たのであるが、神佛分離の際今の處に移したのである。又二十三町、内十町位は山腹を傳ひ、十三町程は峻坂なり。鴨部村大字別所、第五十八番、佐禮山千光院仙遊寺に詣す。本尊千手觀世音菩薩、龍宮より出現せし天智天皇の守護佛と傳ふ。

立ち寄りて佐禮の堂にやすみつゝ

(舊)

六字を唱へ經を讀むべし

龍宮を出で、仙遊の觀世音

(新)

無明の惱み救ひますなり

當山境内よりは蒼社川流域の平野と、夫れに續く燈灘の海光を俯瞰して眺望絶佳、去るに忍びざる心地せり。時間も五時頃なれば寺に參籠せんかとも思ひしも、山中にて一椀の飯も中々貴からんと祭し、暫時風光を賞して下山す。凡そ一里半、頓田川を徒渉し、其堤塘上の旅館に宿す。本日は松山出立以來汽車約八里、徒歩六里餘、札所五ヶ所、其中山越え二ヶ所、河の徒渉二ヶ所、中々に疲勞せり。壯年の明上座も一寸疲れし様子なり。幸に風呂も沸し呉れ安らかに休息す。

○

九日 午前七時出立、又一河を徒渉し、約五町、越智郡櫻井町字國分第五十九番、金光山最勝院國分寺に詣す。本尊藥師如來、行基作

守護の爲たてゝあがむる國分寺

(舊)

一六六

いよ／＼めぐむ薬師なりけり

金色の光は瑠璃とてりはへて

(新)

衆生の惱み救ひ給はん

當山は聖武天皇、天平十三年、勅により行基菩薩開創し、寺域八町四面ありしと云ふ。境内に聖武天皇御惱平癒の記念に植させ給ふたと傳ふる天皇松あり。周圍一丈二尺、實に千二百餘年の齡を誇るに足れり。是れより六十番横峯へは七里あり、然るに汽車にて小松町に赴き、六十二番、六十一番に参りて六十番に参れば、登り百町にて達し至極便利なる故、櫻井驛より乗車すべく行きつゝありしに、前方より洋服と和装との二壯年來り、其の一人田中永平なる人は、昨年春西宮茂松寺にて衲に相見せし事ある者にて、一人は島田始と云ひ共に老衲に私淑し信仰し居るもの。實は昨日今治附近にて一寸御見受けしたるも親しく相見を得ざりし爲、昨夜櫻井驛へ先廻りし逆に國分に参り、御待受けする考にて御跡を慕ひ來れり。兎に角宿迄御立寄を請ふとの事に

驛の近くでもあり、八時五十分の發車迄には三四十分の餘裕もある事として是に應じ休息す。さて兩氏の訴ふる處は、田中氏先年來釋尊降誕二千五百年の記念事業として、神戸の山上に釋尊の一大像を建設すべく發起し各宗管長、及高楠博士、其他名士の賛同を得て事業を進め居りしに、某富豪に其事業を専斷横奪せられ、且つ變交せらるる不快に堪へず。依て島田氏を勧誘し四國巡拜に出でしに、幸に老師に相見を得し事故、將來如何に進むべきかの御指導に預り度しとの事、衲曰く、佛教の本意よりすれば多衆の信仰と淨財とを集めて事を爲すが本意なるも、釋尊も佛法は國王大臣有力の檀那に付屬すと仰られて居る位で、一方資力ある人々の援助も必要故、負て勝つ寸法で氣宇を大きく持ち、夫等富豪と協力して目的を達成せらるゝこそよけれど、懇々慰め訓し置き、八時五十四分の汽車にて九時三十分小松驛に下車。一町餘にて宇新屋敷、第六十二番、天養山觀音院寶壽寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、大師作

さみだれのあとに出でたる玉の井は

(舊)

しらつばなるや一の宮川

一六七

皆観音の慈悲のたまもの

當寺は聖武天皇、天平中、諸國に一の宮を御創立の際、勅願により伊豫一の宮別當として建立せられた靈刹である。住職神野宥心師は鳳精洲師等と姻戚關係あるやにて、早速書院に請し厚遇せらる。本日の日程はこの事に、六十一番香園寺に參詣し同寺に複子を預け置き、六十番、横峯よこたけに登る旨談りしに、同師曰く、香園寺は豫てより老師の來錫を待居る故、本日は必ず引止むるならん。本日香園寺に泊られ明早天六十番に登り、打戻らるゝ方、大に樂ならん幸ひ拙僧も要件にて香園寺に出掛る處故御案内致すとの事、即ち同道、約八町小松町南川、第六十一番、梅檀山香園寺教王院に詣す。本尊大日如來、惠心僧都作

後の世を思へば參れ香園寺

(舊)

とめてとまらぬ白瀧の水

梅檀のかほりは高し香園寺

(新)

願ふ心もかくぞあるべき

果して、早速別館に請入せられ歡待せらる。本日は當山に參籠、明日横峯に登る事とす。

當山は人皇三十二代用明天皇御惱あり、諸寺諸山に御平癒の祈願せられし時、靈夢に金衣白髮の老翁現れ、二名の島に靈地あり。梵舎一字を建立せば忽ち平癒すべしと告げしにより、天皇は直に聖德太子に寺院建立を命じ給ふ。太子聖旨を奉じて此地に渡り靈地を探し求め、七堂伽藍を草創して當山を開基し給ふ。造營の工終る時、再び先の老翁出現し、一七日の間淨室に籠り自ら本尊を安置し、開眼供養の典を擧ぐ。これより天皇の御惱平癒、百官愁眉を開きしと云ふ。天皇叡感不斜、教王院の勅號を賜る。後天平年間、行基菩薩在錫あり、百餘年を経て平城天皇の大同年間に、弘法大師當寺に長く滯錫、塔中六坊を開基せられ、又唐より御將來の金像一寸八分の大日如來を本尊の胸間に納められ、尙一刀三禮の脇立不動明王の像を残され、且女人安産子育ての秘法を傳へらる。又大師唐木梅檀を以て本尊を薰じ、一七日間秘法を修せられし

により梅檀山香園寺と稱す。

子安大師、弘法大師當寺に巡錫の砌、路傍に一人の女難産の爲苦しめるを見るや、秘呪を以て祈り給へば、女人忽ち安産す。大師自ら其嬰兒を抱き上げられ、當山に於て無事成育の御加持を與へ給ふた。この事より大師は永く女人の救済を思ひ立れ女人成佛、安産子育御身代りの秘法を傳へ置かる。この因縁を以て當山に安置する大師を子安弘法大師と稱へ、衆人の尊信淺からず。大師の御詠歌に

あなとうと子安大師の御利益を

(舊)

受けし産子の聲ぞいさまし

祈りなば子をも授けん安らかに

(新)

産みもさせなん大師本願

子安講、現住山岡瑞圓師は住職以來、大師の誓願に因み、一人にても有難利益を蒙むる者多からしめん爲に、子安講を組織して信仰を鼓吹せらる。今や入講者日々に多きを加へ、講員は全國に百萬を突破するの盛況を極む。此等講員並に一般巡拜者の爲

大通夜堂を設け、一時に數百人の參籠の出来る様になり居り、又機關雜誌として月刊「人と佛」を發行し講員に分布せらる。又

三秘學園を設け高野山に認定を受け、此學園を卒業せし者は教師補となる事を得。大正十三年の創立にして修業年限二ヶ年なり。山岡山主は右の如く子安大師の信仰を鼓吹し、併せて國民の精神修養に努力し、尙僧侶の養成等日夜奔走され、非常な尊崇を受け今や當山を四國の高野と呼ぶ。年々規模を増大せられつゝあれば馳て全國に冠たるに至らん。

斯くまでに法の園生の榮ゆるは

人と時とを得たるたまもの

山主及夫人八重子姉 種々歡待せられ、且曰く御急ぎの旅にあらざれば何時迄も緩々滞在せられよとの事。

御佛の心そのまゝ、瑞圓師

法の園生は彌や榮ふらん

今夕夫人八重子姉の嚴父、佐藤善五郎翁七十八歳、及叔父東福寺派報恩寺閑栖、向井大貞師七十歳等來訪せられ閑話す。田中永平、島田始兩氏又々追慕し來り、當寺に宿し、明日横峯に隨伴するとの事。

十日 午前七時、香園寺より所化一位、及田中島田兩氏、明上座等隨伴、八重子姉も



昭和九年十月十日 第六十番伊豫國  
横峯寺 大師堂前

途中迄見送られ、且つ昨夜當山に參籠せし九州の團參二百餘人と前後しつゝ、平地四十町、嶮路六十町、周桑郡千足山村大字千足山、第六十番、石鐵山、横峯寺に詣す。當山は大峯寺とも號す。本尊大日如來、行基作

(舊)

たて横に峰や山邊に寺たてゝ

あまねく人をすくふものかな

横峯と寺は呼べども大日の

光りは直に世を照すなり

(新)

當山は神變大菩薩即ち役の行者、大峯山より錫を飛して四國の最高峯石槌山に入り、横峯に菴りを結ひしが今の寺なり、後弘法大師、大同二年四國巡錫の時、當山に登り、菩薩の淨土を拜し、鎮護國家の道場を建立し、本尊を大日如來とし千手觀世音、石槌山藏王權現等を安置し、六十番の靈場とす。實に四國靈場中燒山寺、雲邊寺にも勝る難所なり。夫丈け路頭展望も雄大に、骨の折れる丈け快感も多し。禮拜了而、九州團參の人の中に寫真機携帶の人あり記念撮影す。寺の上間に請せられ八重子姉の心盡の辨當を開き居りしに、寺よりも此高山不便の地に似合はぬ意外豊富なる馳走を饗せられ、緩々休息して午後二時より途上の大觀を恣にしつゝ下山し、午後五時香園寺に歸る。今夕楠河村東福寺派寺院、法正寺波多野大洲師來訪、同寺檀徒日和佐信治氏夫妻の爲に法名を請はる。即ち

指月院正道淨信居士  
日和佐信治  
常信院正室妙貞大姉  
室 まさ子  
と授與す。

○  
十一日 午前揮毫、午後八重子姉其他數師と、當山奥之院白瀧不動尊に詣す。途中大谷池とて周廻七八町許りの深潭あり。青山倒映し、綠樹波に臥して風光に富む。十數丁にして奥之院に達す。九月二十一日暴風雨の爲、脇士兩童子は顛墜し、堂宇は大破し居るも不動明王は一丈餘の懸瀑を背にし、嚴然として屹立し給ふ。堂宇は位置を變更し水害の患ひなき處に復舊の工事中なり。復興の後は必ず美觀を増すならん。

天地をゆるがすほどの大荒れも  
威容嚴然不動明王

誦經禮拜し、辨當を開き一瓢を傾け悠遊して歸る。晚島田氏來り、今治小泉の泰山寺よりは是非今一度後戻りし講演をも願度しとの事故曲げて承諾あり度と云ふ。依て明

十二日午後赴く事にす。

○  
十二日 午前九時より當山内及三秘學園青年部、婦入部等百餘員の爲に四國巡拜の動機感想と、いろは歌に就き一時間三十分の講演を爲し、同十一時より八重子姉外三人隨伴、約二十町徒歩新居郡水見町、第六十三番、密教山胎藏院吉祥寺に詣す。本尊毘沙門天、大師作

身のうちのあしき非法を打すて、 (舊)

みな吉祥をのぞみいのれよ

毘沙門は世の惡魔をば降伏し (新)

皆吉祥の神となすなり

當寺の本尊は四國靈場中唯一ヶ所のみ靈像なり、山主藤田智空師は香園師とも昵懇の間なり。且永く東寺の執事を勤められし赴にて、東福寺なり納の事をも能く承知し居られ大に歡待せらる。時雨となりしかば八重子姉は小松よりハイヤと呼ばれ、又

二十八町、新居郡神戶村、第六十四番、石鐵山金色院前神寺に詣す。本尊阿彌陀如來、役行者作

一七六

前は神うしろは佛こくらくの

(舊)

よろづの罪をくだくいしつち

前は神本地阿彌陀と手を揃へ

(新)

五逆の罪をくだく石槌

當寺には本堂二つあり、女は女人堂に參詣し、奥の本堂は女人禁制なりしも、今は何れに參るも差支へなし。是より順路六十五番へは十三里四町あるなり。衲等はハイヤ待居り、直に香園寺に歸れば泰山寺より、大本祐章師と島田氏迎に來り居り直に出立、午後四時の汽車にて今治に下車し、午後五時泰山寺に着す。門前には信徒及婦人會員多數出迎す。八日參詣の節、引止められしを辭して進みし事とて閑栖有諦老和上、大歡喜なり、同時に東福派圓照寺華山透洲師來訪、本月五日今治高野寺に參詣せらるゝ旨、新聞に散見せし故一派寺院舉て、高野寺にて御待受申居りしも、終に來駕なか



昭和九年十月十三日 第五十六番今治市外  
小泉村 於泰山寺境内

(前列右より) 隅江博司師 大本祐章師  
大本有諦師 風林軒行應 藤村有憲師  
待僧

りし爲、高野寺に參詣せられたら直に通知を受くる事に同寺に頼み置きしに、其後何の消息もなく案じ居りしに、本日突然當寺に來駕の事を聞及び驚き來りしとの事にて、是非圓照寺へも兩三日の滞在を願ひ度と云はる。兎に角明十三日午後立寄る事とす。當寺先住の未亡人にて祐章師の母堂なるふみ子姉及、婦人會の人々等接待せらる。晚八時より日高村公會堂にて法話す。會衆二百餘員。

十三日 晴 午前中揮毫、午後二時圓照寺より惣代其他數人來迎、大本師及婦人會員も多數隨伴、徒歩十五町圓照寺に着す。西念寺風快洲、佛乘寺岡平慈選、廣紹寺小糸

湘洲の各師來謁、藥石を共にす。午後八時本堂にて法話す。聽衆百餘員、村長玉井信行、惣代白石貞治氏等相見。

一七八

○  
十四日 朝 當山乳地藏に特に誦經す。此地藏尊は乳の出ぬ人が祈ると必ず乳が出る靈驗あり、參詣者絶えず。又御禮に乳房の模型を作りて奉納する爲、堂内は乳房の模型で滿ち居れり。同十一時檀徒數人に三歸戒を授く。午後揮毫。

○  
十五日 午前中揮毫、及相見者多し。同十一時圓照寺出立、田中島田兩氏には此處にて別れ、今治發十一時二十五分の汽車にて小松香園寺に歸る。大本祐章師は當寺迄隨伴せらる、晴。

○  
十六七日 兩日は小雨なりし爲全然休息す。當寺滞在中、山主及八重子夫人は衲に窮屈な思ひをさせまいと朝一度挨拶に來られ、時には晚餐を共にせらるゝ位にて、青年

部の川崎師と婦人部福江子、須磨子の兩嬢と、明上座等に任せ置き、心置き無くせられしは實に行届きたる事にて満足限りなし。

氣心をつかはぬ様と氣を配る

八重子の君の心嬉しも

實際他家に請ぜられても、餘りに主人側の人々の喰付て世話を焼かれるのは却て難有迷惑の場合多し。特に長逗留の場合などは尤も然り。然ればとて又打捨て置かるゝも心淋しきもの、何事でも程々こそよけれ。此點に於て高知高野寺、徳島興源寺、伊豫松山阪田家等も凡て中庸を得たる待遇にて安らかに休養するを得たるを感謝し居れり。さて明上座巡拜終了する迄隨伴の希望にて吉田町以來伴ひしに、當春肋膜炎を患ひし瘡痕猶残り居るにや數日來輕微なる熱を發し、血色も悪く食欲も進まず。本人も苦しそうにもあり、伴ひ居るも不安なる爲、此處より宇和島の自坊に返す事とし本日歸らしむ。却説香園寺滞在も十日程にもなりし爲、明十八日は天氣よければ六十五番へ向け出立せんと決す。今夕は山主及大人特に別宴を設けらる。山主曰く御巡拜中故

一七九



強て御引留めは出来ぬが、此處にも老師の御家居が一軒あると思はれて、巡拜終了後は何時でも歸て来て、一生でも居つて下さい。決して御不由や窮屈には致さぬからとの事に、納も四國巡拜中再遊を勧められし處は澤山なるも、斯の如き徹底的な言を受くるは全く最初にて痛く感激せり。又明日は二宮瑞龍師を隨行せしむとの事。

○

十八日 午前七時、大快晴に恵まれ香園寺出立、二宮師同伴、一同小松驛に見送らる。同時半發車六十五番へ向ふ。車窓より石槌山を眺むれば、山頂已に白雪にて薄化粧を施し居り美觀なり。以て如何に高山なるかを知るに足る。

香園の寺出で立ちてながむれば

石槌山は初雪の顔

いかめしき石槌山も薄化粧

白雪こそはあだのものなり

車中より瀬戸内海の島々の浮出でたるを望むに、四坂島の精鍊所の烟突より吐き出

す烟は、中天にたなびきて却て風情を添ふ。

のとけさや浮島々の其中に

四坂の烟たなびきにけり

車中より土居の延命寺を遙拜し、甍松の因縁を聞く、大師四國靈場御開創の時、此地に苗松を御手植に成り、後再び此地に巡錫の際、松の邊に一人の甍居りしを憐み給ひ、千枚通しを創札して其一枚を甍に與へられしに、靈驗あらたに忽ち全快したれば、大師に隨從し遂に得度を受け法忍と名けられ、其因縁により此地に摩尼山、延命寺を開創せしと傳ふ。

歩みなばとく行きすぎんいざり松

千代の縁を此處に榮えよ

車上約十一里、十時頃三島驛に下車。山路徒歩里餘、宇摩郡金田村、第六十五番、慈尊院、由靈山三角寺に詣す。本尊十一面觀世音菩薩、大師作

おそろしや三つのかども入るならば (舊)

心をまろく彌陀を頼めよ

三つの角まろめて心まどかなる

圓通尊の慈悲をしたへよ

(新)

當寺は聖武天皇の御勅願にて、行基菩薩の開創なるが、大師護摩の秘法を修せらるゝに三角の護摩檀を用ひ給ひ、其芳躅今にあり。依て三角寺と號す。當寺にて點心を受け揮毫數枚、夫より五十八町嶮坂を登り、又下り、三角寺の奥之院、金光山龍仙寺に詣す。大師は前後二回登山修法、後弘仁五年四十二歳の大厄を除かんと、自ら像を刻し此地に安置す。現今の本尊是なり。寺は山又山の溪谷、古木蒼鬱とし晝尙暗く、奇巖怪石屹立重疊せる一大岩壁の下にあり。満山の風光最も秀麗なり。昔高野は女人禁制の地なれば、當山を女人高野として女人の參詣自由なりしかば、今に女人成佛の靈場と傳へられ年中參詣通夜する者絶えず。當山を厄除大師又は虫除け大師（五穀の害虫を除く）とも云ふ。午後三時にて未だ時間は早かりしも次へは中々の難路なり。且つ香園寺と當山とは法縁の間柄とて香園山主より依頼もしてあり、旁々當山に參籠

す。寺觀は中々宏壯にして、今又通夜堂の大建築最中なり。朗々たる溪流の音は、颯々たる松風に和して、晝夜斷間なく、轉た靜寂閑雅の情深し、古人の所謂

千古金沙灘上水 朗々猶爲誦經聲

の感あり。

水の音松の響も其儘に

皆御佛の聲とこそきけ

朗々と流るゝ水は其儘に

誦經の聲と聞くもたふとし

山主服部覺禪上人、及執事和尚等歡待せらる。二三揮毫を爲し、溪聲を添乳に解定す。本日は汽車十一里、山路徒步三里餘。

十九日 好晴 午前六時出立、上り八町、夫より曼陀峯の山嶺を傳ふ。時に山又山は波浪の如く起伏し、遙かの山嶺より、旭日杲々として昇り、溪谷に起る雲霧に映じ、

五彩の奇觀を呈す。全く羽化登仙の心地なり。

脚下に五色の雲をふみしめて

此身ながらの佛なりけり

谷々に起る五色の雲ふみて

羽化登仙の心地こそすれ

途上十數頭の馬、奥之院、籠り堂の建築用セメント袋を積みて難路を運び來るに逢ふ。其足すべりて、二尺進めば一尺は戻る。蹄は土に喰ひ込み、全身汗流れて其困苦の状見るに忍びず。覺えず路傍に避けて通しつゝ、落涙合掌せば、馬も又頭を垂れて涙ぐむものゝ如し。併し彼等も三角寺奥之院の建築に貢献する事故、定めて當來の勝緣となるべしと、靜かに彼等の爲に光明眞言を誦し、感謝し健康を祈る。是等の事、心なき者より見れば、つまらぬ事の様に思ふならんも、實地に就て見れば必ず同感を起すべし。

重き荷を負ふて峻しき路運ぶ

馬をながめて涙あふるゝ

川瀧村に出て、香園寺ゆかりの家にて點心を受け、夫より十四五町平坦、山路五十町、山腹の善根院にて一休し、又五十町、徳島縣、佐馬地村白地、第六十六番、巨籠山雲邊寺に詣す。本尊千手觀世音菩薩 大師作

はるくくと雲のほとりの寺に來て

(舊)

つきひを今は麓にぞ見る

はるくと雲のほとりに分け登り

(新)

眞如の月を見るぞうれしき

當山は海拔三千三百尺の殆んど山嶺にあり。四國靈場中、横峯、燒山寺等と並ぶ難所なり。途上阿讃豫の三國を展望し、實に偉觀なり。時に午後四時なりしかば、住職は不在なるも、留護の人親切に參籠を勧めらる。然るに至て無人の様にも見受、又五十丁下れば宿もあるとの事に、二宮師とも相談し、暫時休息して險坂五十丁を下る。然るに麓には遍路宿一軒よりなく、それも先客數人あり、到抵堪へられぬ事とて、早

や黄昏に迫り居りしも路も平坦の事なり、薄月夜の事故、一里半小松尾寺の附近迄辿りて宿を求むる事とす。行く／＼日全く暮れ、此邊は非常なる避村なるにや、電燈もなく、漸く薄月夜をたよりに進む。幸に二宮師が臆氣ながら、順路を知り居りし爲よかりしも、左もなくば随分困りし事ならん。四國巡拜中、斯く遅く迄徒歩せし事は全く最初なり。恐くは最後ならんか

黄昏に宿も未だしなれぬ道

迎る心はさみしかりけり

午後八時、漸く小松寺に辿り着く。參詣は明朝の事とし、先づ然るべき宿を求むべく、二宮師庫裡に尋ねれば、寺僧は尾關老師ならば、興昌寺(東福寺派にして此地より二里の觀音寺町にあり)よりも頼まれ居る事故、是非當寺に泊られ度、幸に本日は風呂も沸き居る故との事に投宿す。然るに戒浴薬石を受け居る處へ、寺よりの通知ありしにや、當村駐在の佐川豊八巡查、早速來訪し、本部よりの命もあり、且つ興昌寺正樂寺兩師よりも承り居る故、何か御用もあらばとの事に、明日觀音寺に參詣の電話丈け

を頼み置けり、本日は伊豫三角寺の奥之院より、山又山の難路十里の徒歩、全く巡拜以來の最記録にて随分無理な路なりしも、札所の寺に參籠の出來しは實に満足なりし、當山住職高橋淨賢師は中風症なるも、杖にすがりつゝ書院に來られ種々閑話あり。當寺は香川縣三豊郡辻村小松尾山、大興寺と稱す。

○ 二十日 早天 内陣に參拜す。第六十七番、本尊藥師如來、大師作

植置きし小松尾寺を眺むれば

(舊)

法の教の風ぞ吹き來る

植置きし小松も今は大興寺

(新)

法の枝葉は千代に榮えん

當寺は嵯峨天皇の勅願にて、大師開創し給ふ處なり。揮毫數枚、午前九時出立、佐川巡查も隨行す。途中有名なる豊田村の一太郎ヤイの母、岡田かめ女の墓前を通る。即ち誦經回向す。二首あり